

令和 6 年度

学力調査結果報告書

■ 全国学力・学習状況調査

- ・ 国語、算数・数学
- ・ 児童生徒質問紙

■ 福岡県学力実態調査

- ・ 国語、算数・数学

令和 6 年 9 月

大野城市教育委員会

も く じ

I 全国学力・学習状況調査の概要・・・・・・・・・・P1

II 全国学力・学習状況調査結果の概要・・・・・・・・・・P2

- 1 小学校（6年生）各教科の平均正答率
- 2 中学校（3年生）各教科の平均正答率
- 3 概況
- 4 経年変化
- 5 四分位層比較
- 6 同一集団比較

III 全国学力・学習状況調査校種及び教科別調査結果・・P8

- 1 小学校国語
- 2 小学校算数
- 3 中学校国語
- 4 中学校数学

IV 全国学力・学習状況調査児童・生徒

質問紙調査の結果・・・・・・・・・・P12

- 1 「学びに向かう力、人間性等」に関する回答状況
 - (1) 学びを調整する力
 - (2) 粘り強く挑む力
 - (3) 自己有用感・自己効力感
 - (4) 協働する力
 - (5) 経年変化
- 2 その他（生活に関する項目、学校生活に関する項目、授業に関する項目）

V 令和6年度福岡県学力調査結果・・・・・・・・・・P23

I 全国学力・学習状況調査の概要

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、教育に関する検証改善サイクルを確立する。

また、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査の対象とする児童生徒

小学校第6学年、中学校第3学年

3 調査方法

(1) 児童生徒に対する調査

ア 教科に関する調査

国語、算数・数学

イ 質問紙調査

学習意欲や学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査

(2) 学校に対する質問紙調査

学校における指導方法に関する取組や学校における人的・物的な教育条件の整備の状況に関する質問紙調査

4 調査日

令和6年4月18日（木）

5 調査した児童生徒数 [単位：人]

小学校	国語	算数
大野城市	1,034	1,035
福岡県（公立）	42,540	42,553
全国（公立）	947,364	947,579

中学校	国語	数学
大野城市	909	907
福岡県（公立）	39,558	39,577
全国（公立）	875,574	875,952

Ⅱ 全国学力・学習状況調査結果の概要

調査結果について、大野城市と福岡県、全国の平均正答率を比較する。また、同一集団の令和5年度と令和6年度の福岡県平均正答率による比較をする。

- 正答率は問題数に対する正答数の割合を百分率で表した値
- 全国比は、全国を100とした場合の大野城市の平均正答率
全国比の算出方法は、（本市平均正答率÷全国平均正答率）×100とする

1 小学校（6年生）各教科の平均正答率

＜児童数：国語 1,034 名 算数 1,035 名＞

	国 語	算 数
大野城市	75.0	70.0
福岡県（公立）	69.0	64.0
全 国（公立）	67.7	63.4
全国比【前年度差】	110.7【+2.1】	110.4【+3.2】
R5大野城市	108.6	107.2

2 中学校（3年生）各教科の平均正答率

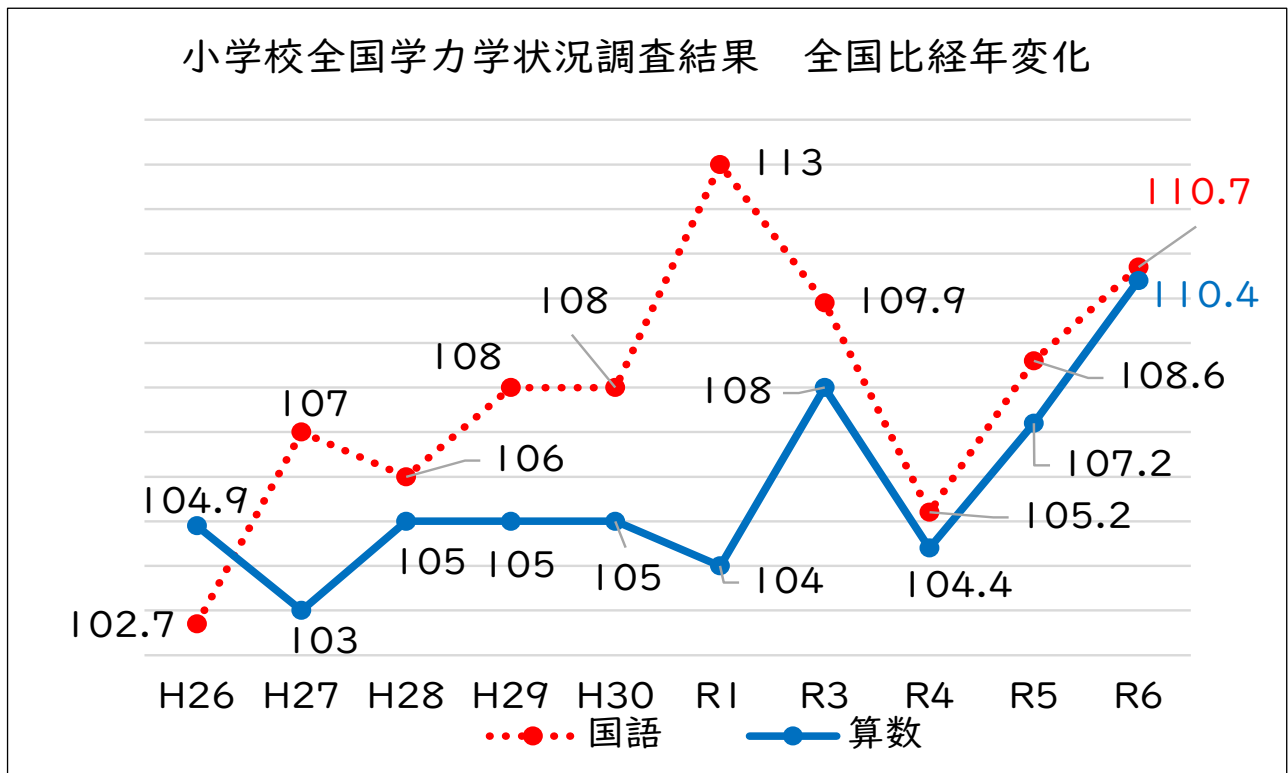
＜生徒数：国語 909 名 数学 907 名＞

	国 語	数 学
大野城市	61.0	57.0
福岡県（公立）	58.0	51.0
全 国（公立）	58.1	52.5
全国比【前年度差】	105.0【+0.4】	108.6【-5.1】
R5大野城市	104.6	113.7

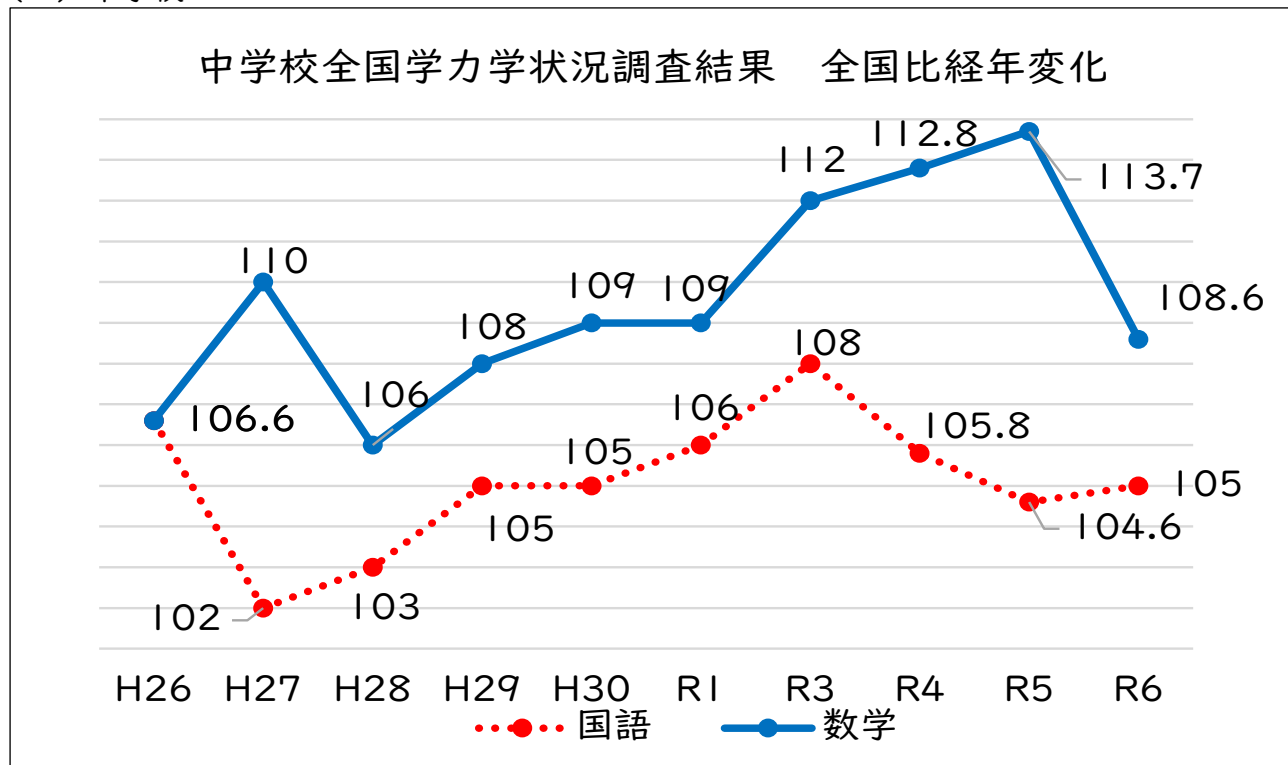
3 概況

- 小・中学校ともに、全ての教科において全国平均、県平均を上回った。
- 小学校は国語、算数ともに前年度大野城市平均を上回った。
- 中学校の国語は前年度大野城市平均を上回ったが、数学は5.1ポイント下回った。
- 全国及び福岡県と比較すると、小・中学校いずれも平均を上回る結果となっており、本市の学力が高水準で維持されていることが分かる。

4 経年変化
(1) 小学校



(2) 中学校

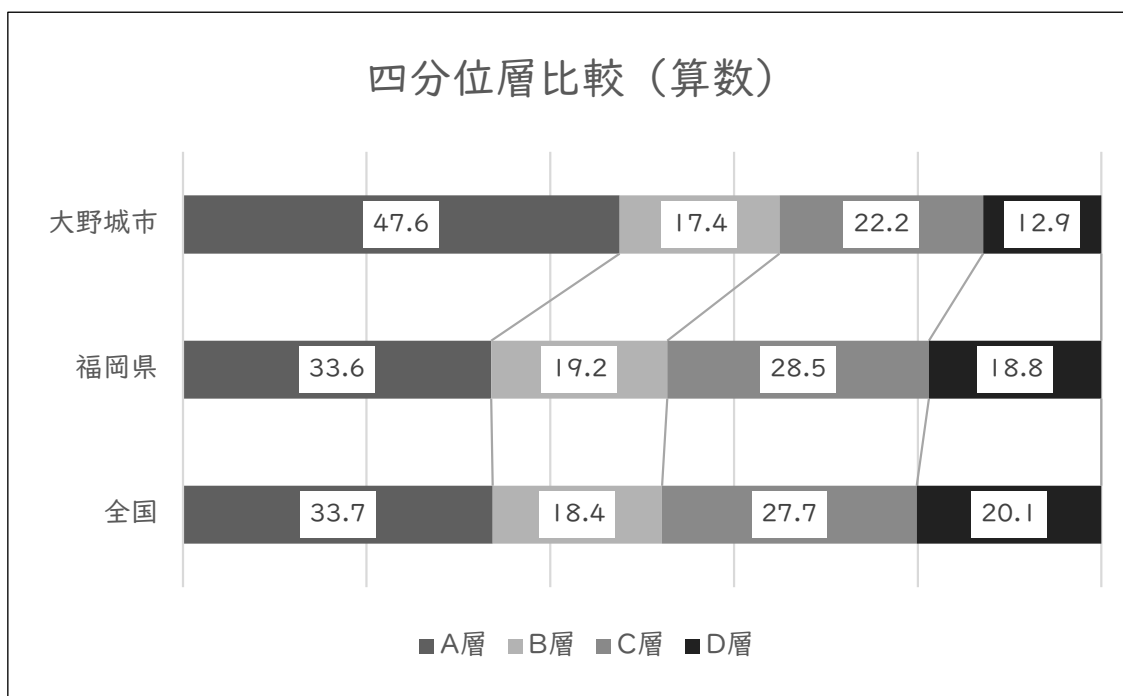
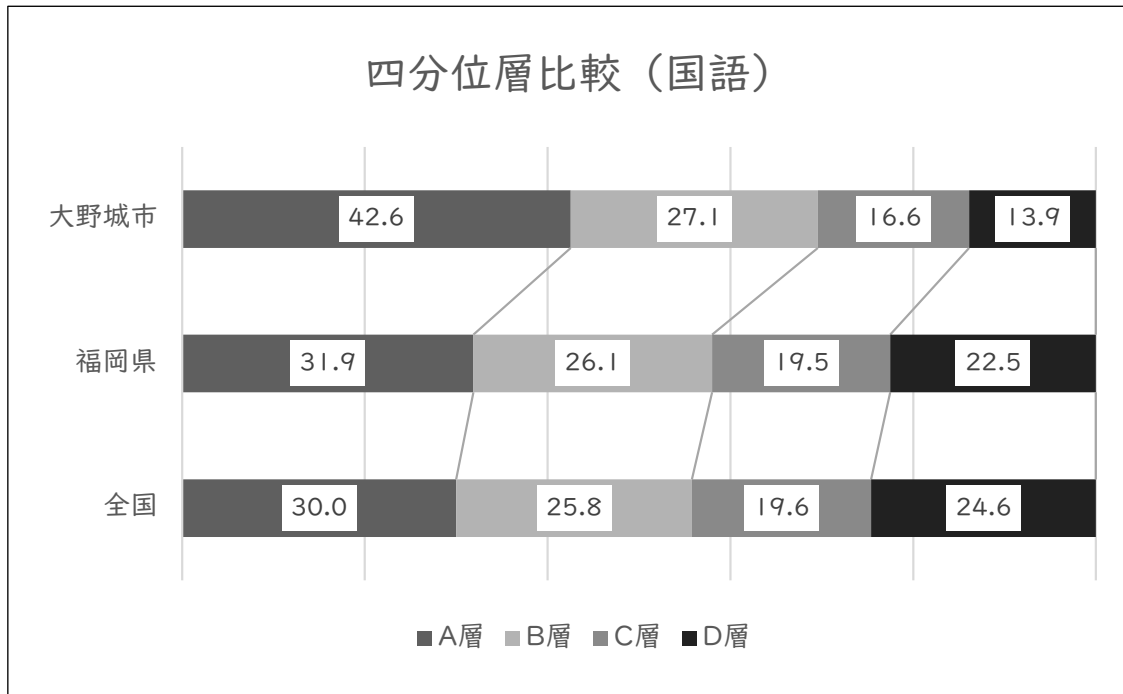


(令和元年度まではB問題の全国比)

5 四分位層比較

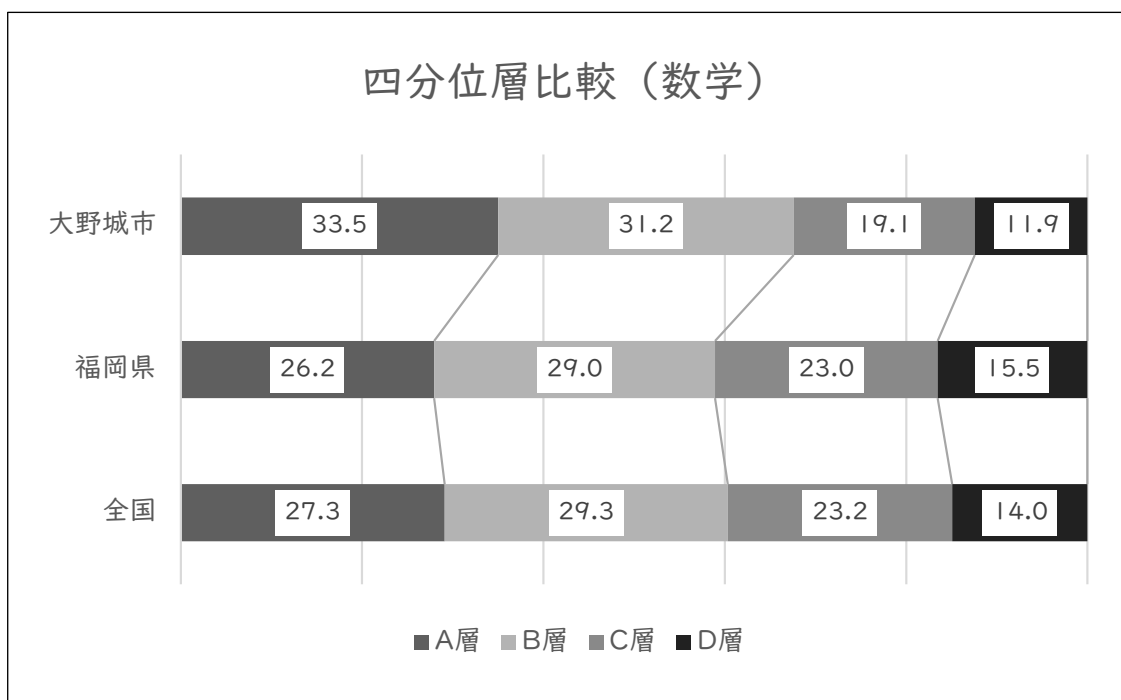
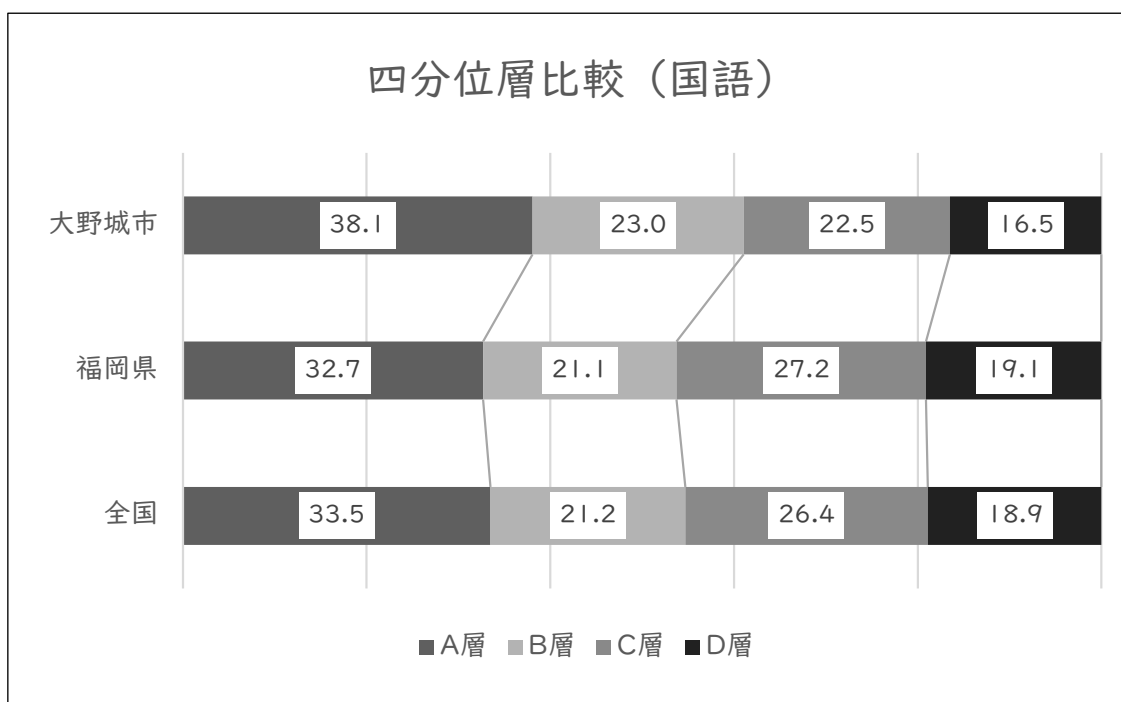
四分位数とは、全国における正答数のデータを最小値から最大値まで順に並べて、4分割した数値であり、数値が高い層から A、B、C、D と表す。

(1) 小学校



- A層の割合が国語は全国比を12.6%、算数は13.9%上回っており、高い水準で学習活動が展開されていることが分かる。
- A層が多くなることで、他児童との理解度の差が大きくなることが懸念される。全ての層の児童にとって学びがいのある学習課題の提示など、さらなる授業改善が求められる。

(2) 中学校

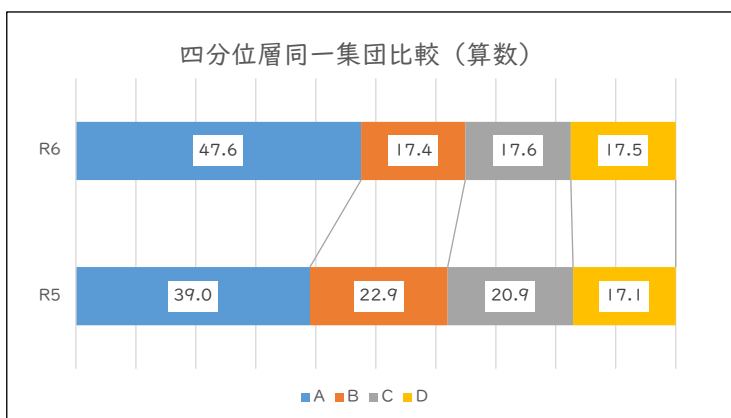
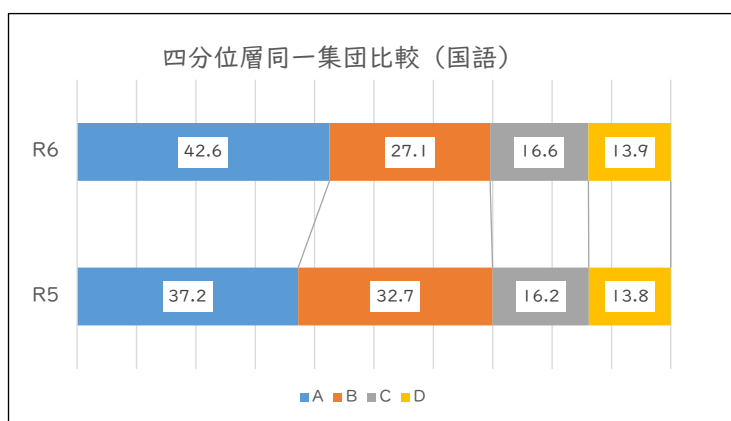
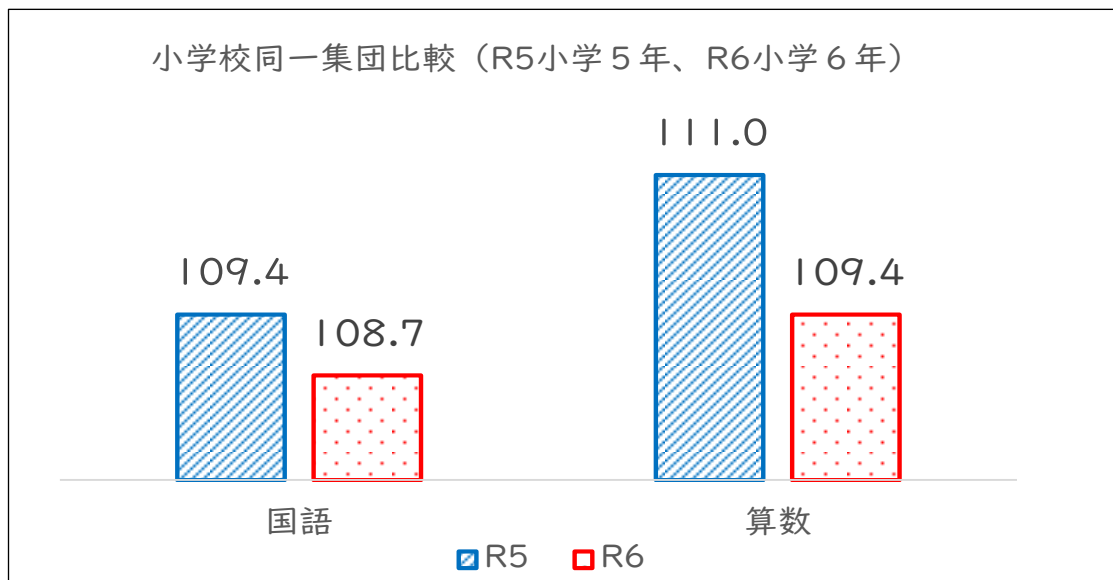


- 国語は、A層、B層の割合が全国比をそれぞれ4.6%、1.8%上回っている。D層が16.5%と小学校や中学校数学と比べて若干多い割合になっているので、授業における個別支援等の手だてが必要である。
- 数学は、A層、B層の割合が全国比をそれぞれ6.2%、1.9%上回っている。D層が11.9%と低いことから、数学が苦手な生徒に対する支援が効果的に行われていることが分かる。

6 同一集団比較

（小5、中2は福岡県学力調査の福岡県比、小6、中3は全国学力・学習状況調査の福岡県比）

（1）小学校

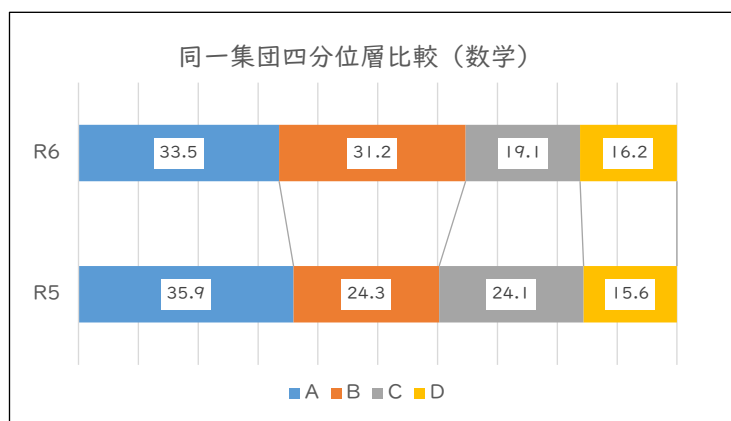
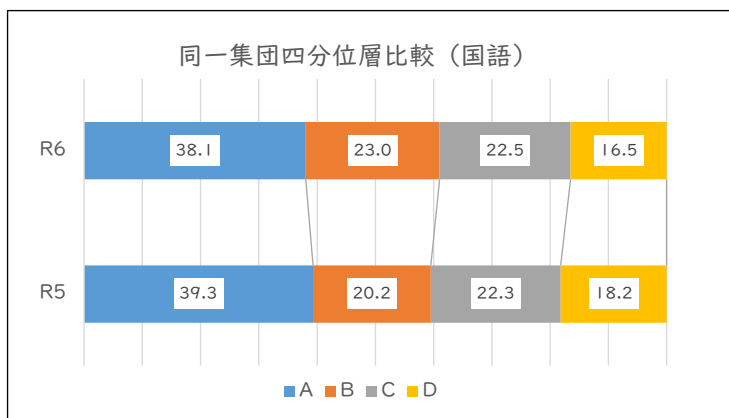
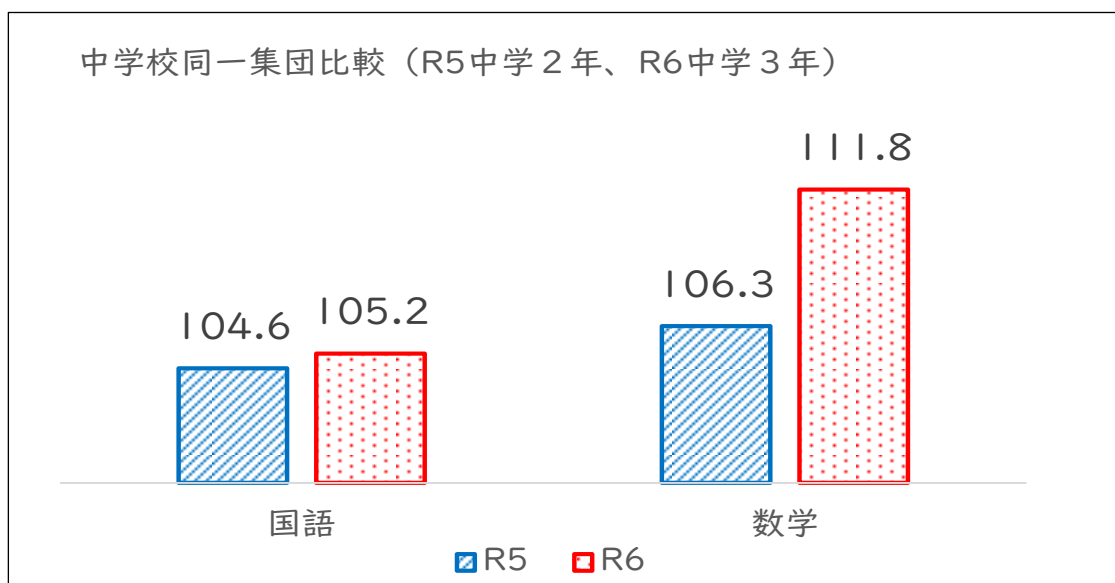


○ 経年変化では、国語、算数とも上昇していたが、同一集団比較では、2教科ともに数値は下がっている。学年が上がるにつれて学習内容の難易度が上がることが要因の一つと考えられる。

○ 四分位層同一集団の結果からは、A層の割合が上昇していることが分かる。

○ C、D層の割合があまり変化していない状況を考えると理解度の差が4年生から5年生にかけて大きくなったことが分かる。A層からD層の児童に柔軟に対応するためには、子ども同士の学び合いの場を設定する等より一層の授業改善が必要である。

(2) 中学校



○ 経年比較では、数学が 5.1 ポイント下がっていたが、同一集団比較では、逆に 5.5 ポイント上昇している。これは、中学2年時の学習において、基本的な内容の定着を図る授業が効果的に推進されたことを表している。特に、四分位層比較から C 層の生徒が B 層へと上昇していることが分かる。

- 国語、数学ともに A 層の割合が下がっている。中学生での学習は学年が上がるにつれて難易度が上昇するので、教師の指導方法の改善が必要である。
- 同一集団における D 層の割合に大きな変容がない。これは、授業内容を理解できない生徒が固定化されていることを表している。個別支援の場や生徒同士の学び合いの場を設定するなどの対策が必要である。

Ⅲ 全国学力・学習状況調査校種及び教科別調査結果

Ⅰ 小学校国語

(1) 学習指導要領の領域別正答率(%)

学習指導要領の領域等	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
全体	14	75	69	67.7	110.8
言葉の特徴や使い方に関する事項	4	72.5	66.0	64.4	112.6
情報の扱い方に関する事項	1	89.9	87.5	86.9	103.5
我が国の言語文化に関する事項	1	84.0	75.5	74.6	112.6
話すこと・聞くこと	3	65.9	60.9	59.8	110.2
書くこと	2	74.1	70.8	68.4	108.3
読むこと	3	78.9	71.7	70.7	111.6

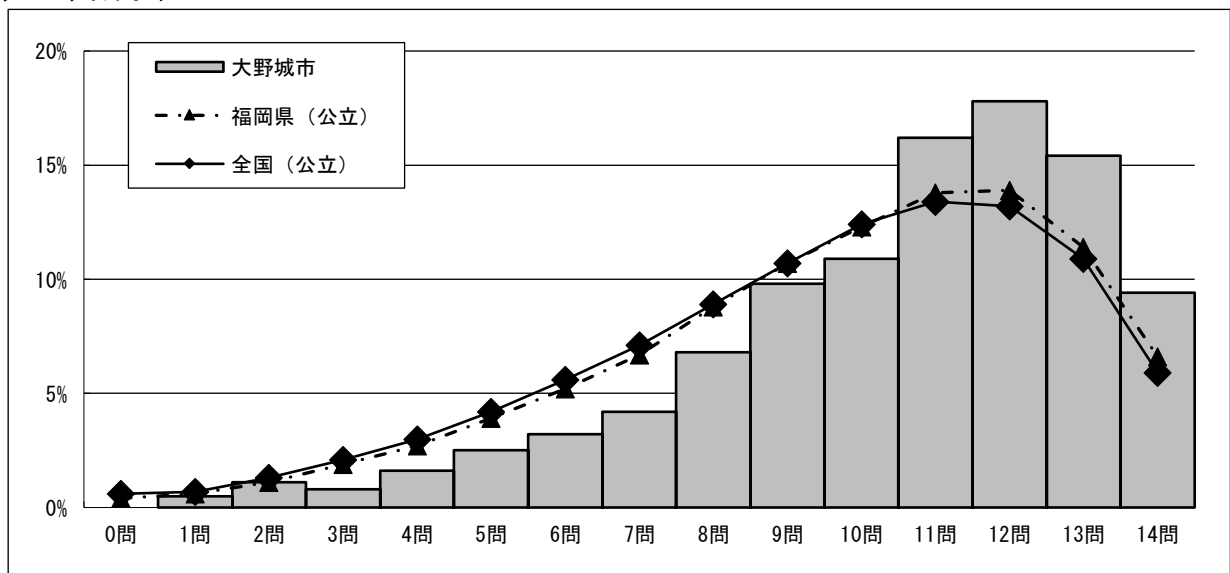
(2) 評価観点別正答率(%)

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
知識・技能	6	77.3	71.2	69.8	110.7
思考・判断・表現	8	72.8	67.5	66.0	110.3

(3) 問題形式別正答率(%)

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
選択式	10	76.3	70.6	69.9	109.2
短答式	2	68.4	62.4	59.7	114.6
記述式	2	73.2	67.8	64.6	113.3

(4) 正答数分布グラフ



(5) 分析

平均正答率は、全ての領域・区分において、全国を上回っている。また、基礎的な内容である「知識・技能」、発展的な内容の「思考・判断・表現」とともに高い水準であることから全ての児童に対応した授業が展開されていることが分かる。

2 小学校算数

(1) 学習指導要領の領域別

学習指導要領の領域等	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
全体	16	70	64	63.4	110.4
A 数と計算	6	74.9	67.1	66.0	113.5
B 図形	4	72.2	66.3	66.3	108.9
C 測定	0				
C 変化と関係	3	57.9	51.1	51.7	112.0
D データの活用	4	66.5	61.9	61.8	107.6

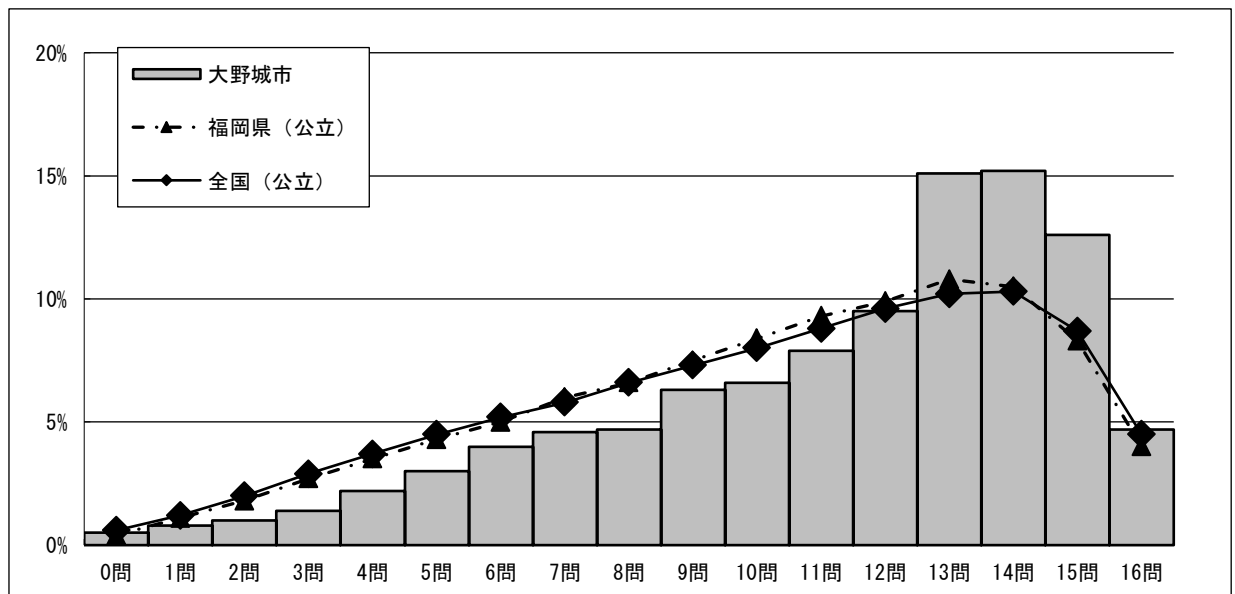
(2) 評価観点別

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
知識・技能	9	79.4	73.3	72.8	109.1
思考・判断・表現	7	58.0	51.4	51.4	112.8

(3) 問題系識別

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
選択式	5	81.7	75.8	75.3	108.5
短答式	7	69.2	62.0	62.0	111.6
記述式	4	57.0	51.7	51.0	111.8

(4) 正答数分布グラフ



(5) 分析

平均正答率は、全ての領域・区分において、全国を上回っている。また、基礎的な内容である「知識・技能」、発展的な内容の「思考・判断・表現」ともに高い水準であることから全ての児童に対応した授業が展開されていることが分かる。しかし、「変化と関係」、「思考・判断・表現」及び「記述式」の正答率が50%台であることから、物事を関連づけて表現する（自分の答えを導き出す）機会を意図的に設定する必要がある。

3 中学校国語

(1) 学習指導要領の領域別正答率(%)

学習指導要領の領域等	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
全体	15	61	58	58.1	105.0
言葉の特徴や使い方に関する事項	3	63.0	59.9	59.2	106.4
情報の扱い方に関する事項	2	62.8	58.9	59.6	105.4
我が国の言語文化に関する事項	1	80.5	75.9	75.6	106.5
話すこと・聞くこと	3	63.5	58.8	58.8	108.0
書くこと	2	66.7	65.0	65.3	102.1
読むこと	4	49.7	46.6	47.9	103.8

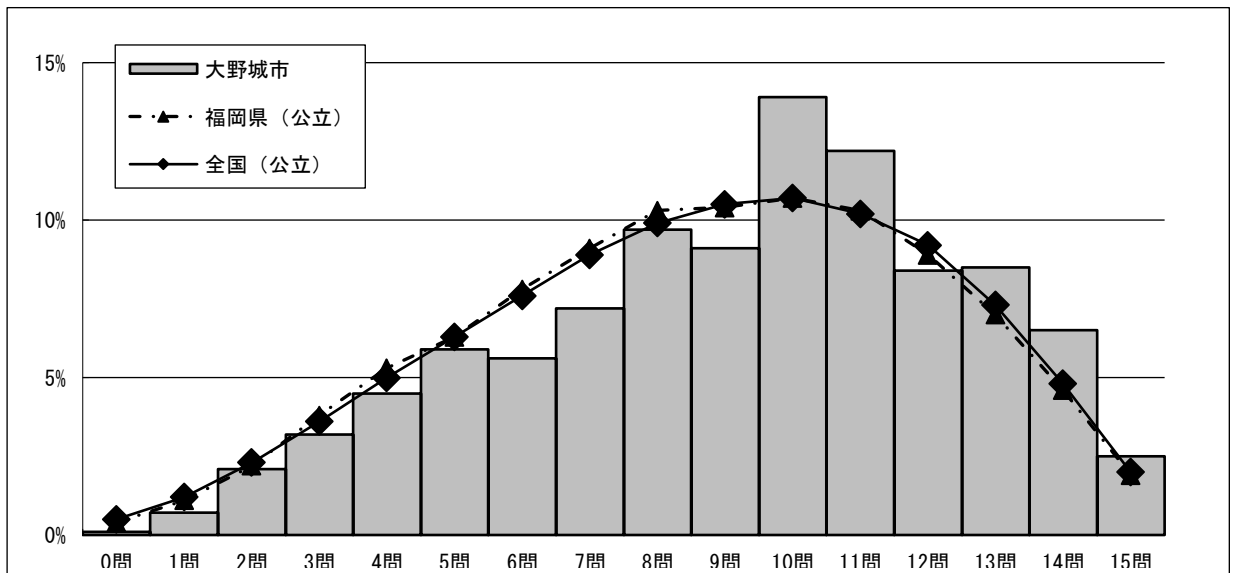
(2) 評価観点別正答率(%)

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
知識・技能	6	65.9	62.3	62.0	106.3
思考・判断・表現	9	58.1	54.7	55.4	104.9

(3) 問題形式別正答率(%)

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
選択式	9	63.8	60.4	61.0	104.6
短答式	3	64.5	62.1	61.8	104.4
記述式	3	50.0	45.4	45.5	109.9

(4) 正答数分布グラフ



(5) 分析

平均正答率は、全ての領域・区分において、全国を上回っているが、「書くこと」、「読むこと」、及び「記述式」の平均正答率、全国比は低い。「書くこと」「読むこと」の資質・能力育成に関しては、国語科だけでなく全ての教科等での取組が必要である。

4 中学校数学

(1) 学習指導要領の領域別正答率(%)

学習指導要領の領域等	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
全体	16	57	51	52.5	108.6
A 数と式	5	57.3	50.4	51.1	112.1
B 図形	3	42.3	37.0	40.3	105.0
C 関数	4	62.8	58.9	60.7	103.5
D データの活用	4	61.2	56.3	55.5	110.3

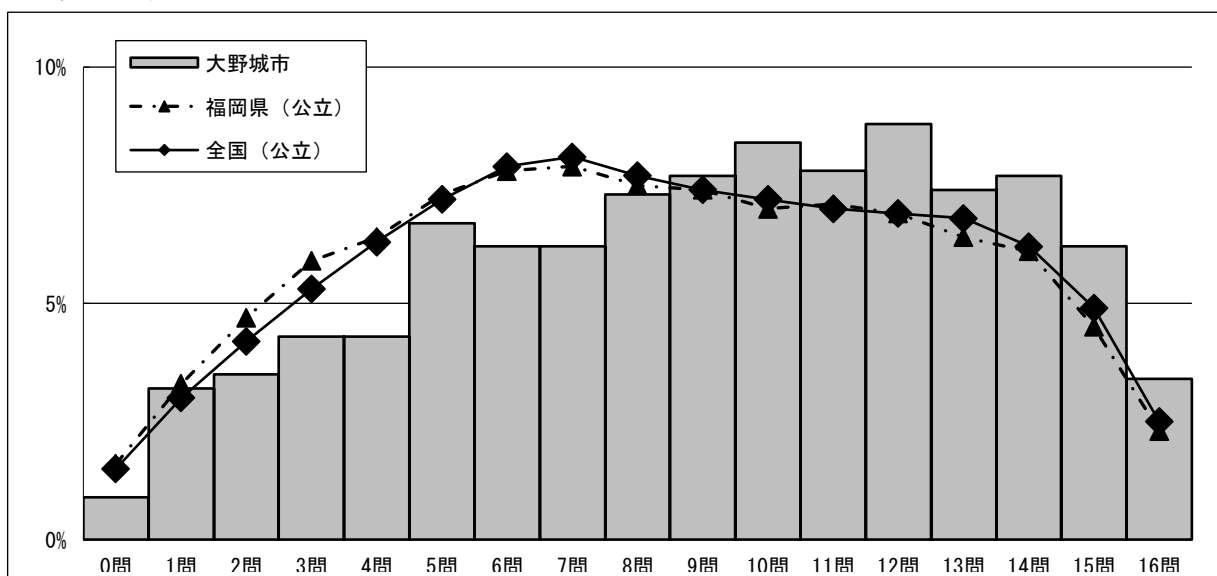
(2) 評価観点別正答率(%)

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
知識・技能	11	67.1	61.8	63.1	106.3
思考・判断・表現	5	34.2	28.7	29.3	116.7

(3) 問題形式別正答率(%)

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
選択式	5	62.8	57.6	58.5	107.4
短答式	6	70.7	65.4	67.0	105.5
記述式	5	34.2	28.7	29.3	116.7

(4) 正答数分布グラフ



(5) 分析

平均正答率は、全ての領域・区分において、全国を上回っている。しかし、「思考・判断・表現」(=「記述式」)の正答率は34.2%と低い。本市においては、同一集団比較の結果からも分かるように、基礎的な「知識・技能」を伸ばす指導は効果的に作用しているので、今後は「思考・判断・表現」を伸ばす効果的な指導の在り方を追究していく必要がある。

Ⅳ 全国学力・学習状況調査児童・生徒質問紙調査の結果

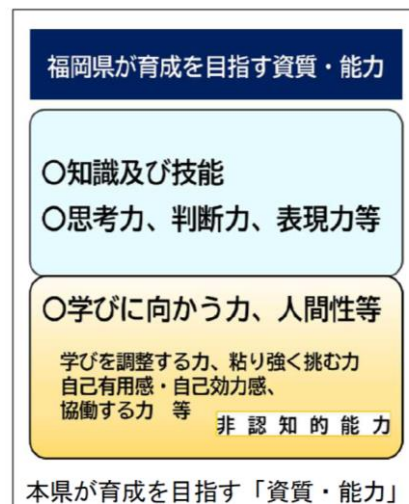
Ⅰ 「学びに向かう力、人間性等」に関する回答状況

福岡県教育庁教育振興部義務教育課は、県が育成を目指す「資質・能力」について次のように述べている。

「これまで、本県においては、全国学力・学習状況調査結果として、文部科学省が示す資質・能力の三つの柱のうち、主に教科に関する調査をもとに「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」の状況を分析、公表してきた。文部科学省は、資質・能力のもう一つの柱である「学びに向かう力、人間性等」は、「児童生徒が『どのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか』に関わるものであり、他の二つの柱をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素である。」としている。そこで、本県においては、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」ととともに、非認知的要素を多く含む「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱をバランスよく育成することを目指す。」（図参照）

その上で、「学びに向かう力、人間性等」を「学びを調整する力」「粘り強く挑む力」「自己有用感・自己効力感」「協働する力」に分類し、全国学力・学習状況調査児童生徒質問項目と関連するものを次のように提示した。

これらの質問事項に関する回答を分析し本市児童生徒の状況と課題を明らかにする。

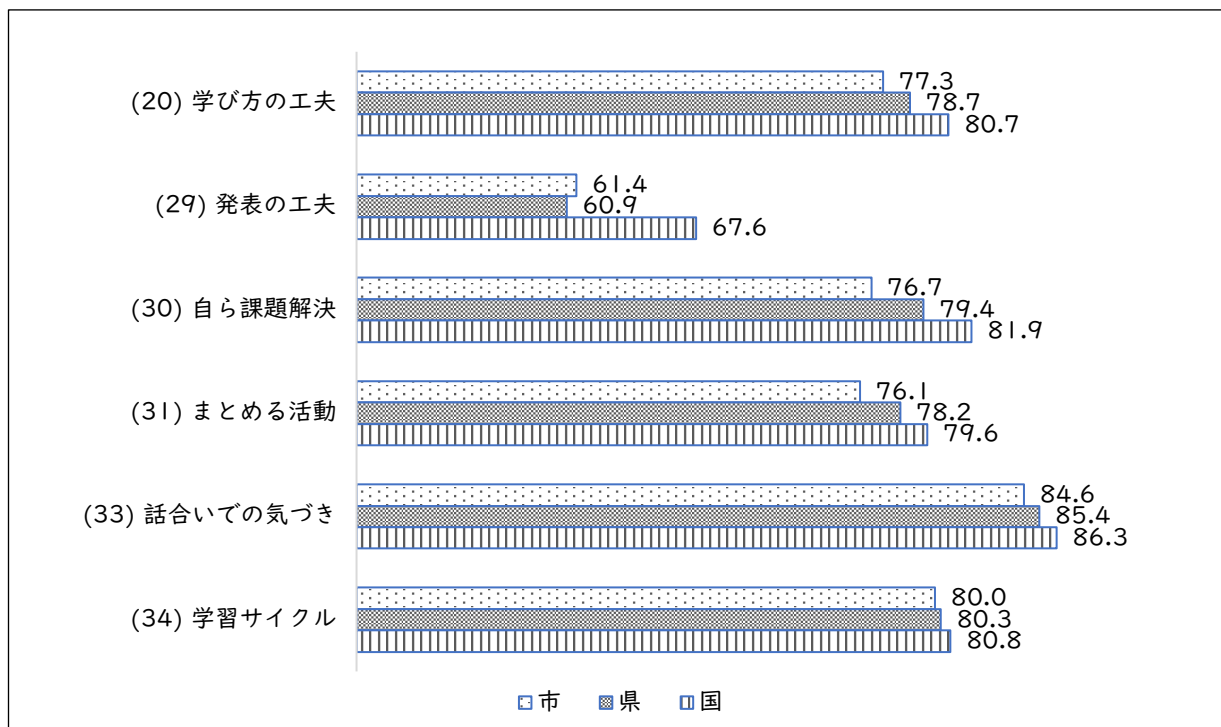


質問 No.	質問事項
学びを調整する力	
20	分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか
29	授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか
30	授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか
31	授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか
33	学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか
34	学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか
粘り強く挑む力	
11	将来の夢や目標を持っていますか
自己有用感・自己効力感	
9	自分には、よいところがあると思いますか
10	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか
協働する力	
12	人が困っているときは、進んで助けていますか
15	人の役に立つ人間になりたいと思いますか
17	自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか
25	地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか

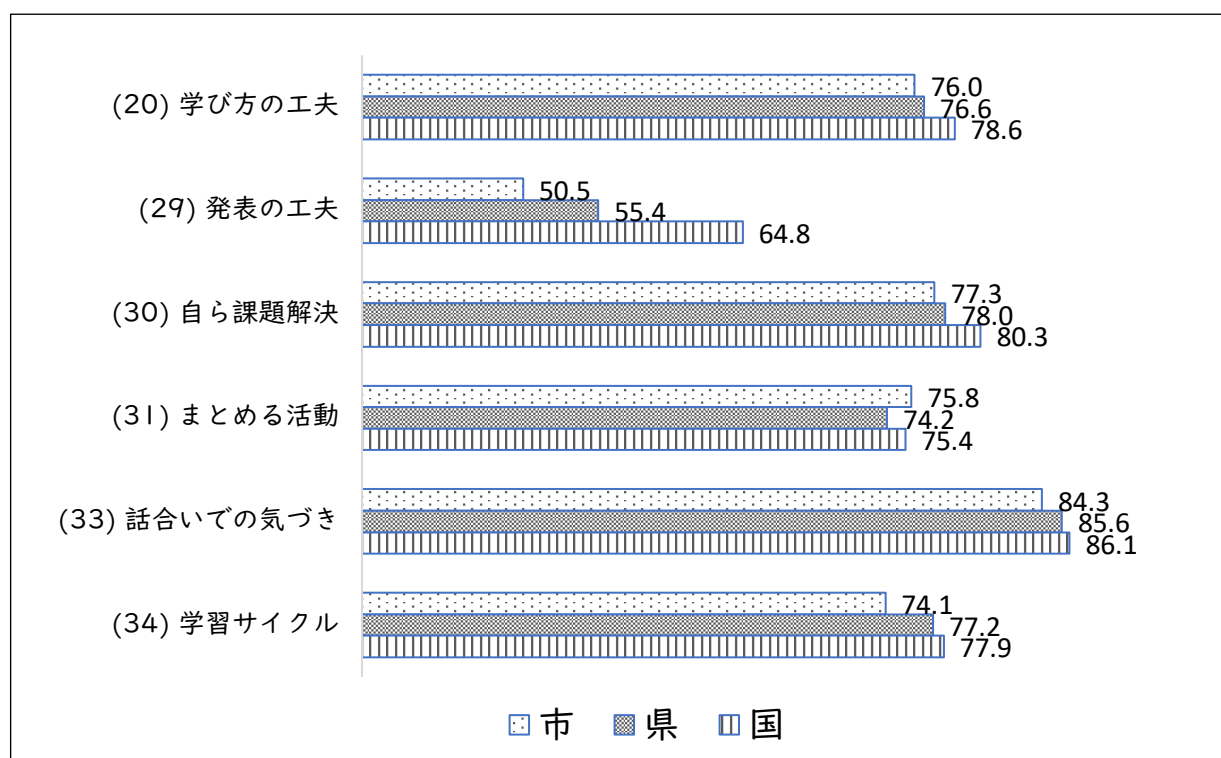
※ グラフの数値は「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と肯定的に回答した児童生徒の割合(%)

(1) 学びを調整する力

① 小学校



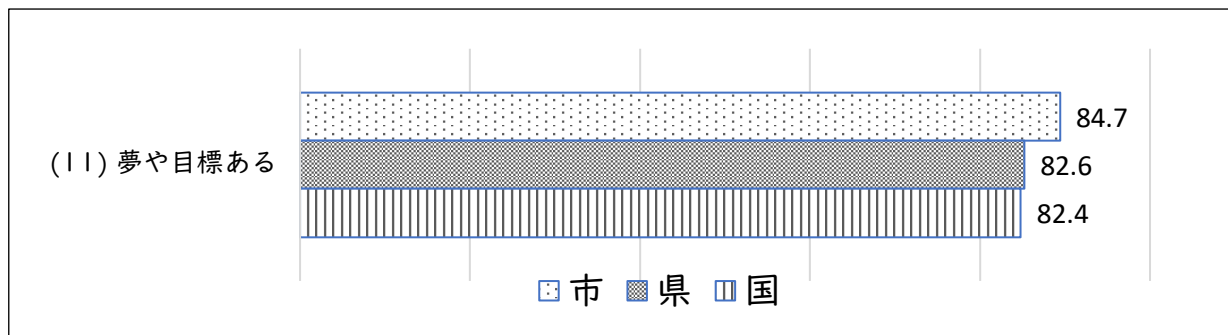
② 中学校



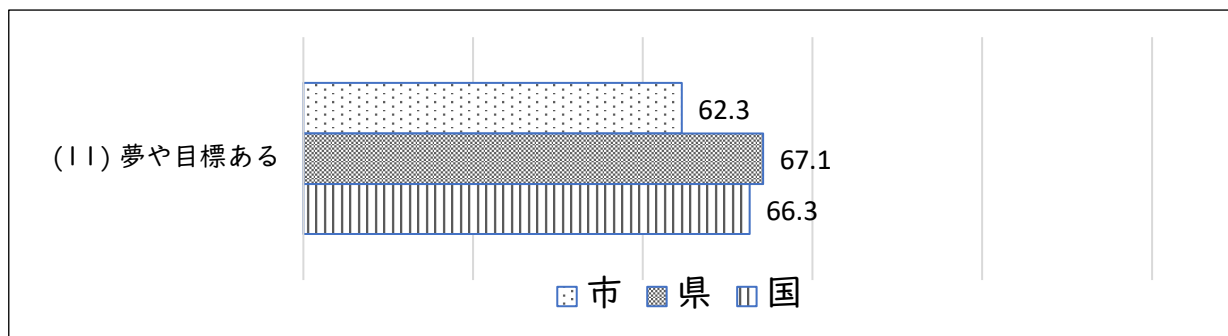
中学校「(31)まとめる活動」以外の全ての項目で全国比を下回っている。特に「(29)発表の工夫」は、小学校-6.2%、中学校-14.3%となっている。これは、授業中の教師の問いが一問一答形式になっている可能性が高いことを示している。教師が「教える」授業から児童生徒が自ら「学ぶ」授業スタイルへの転換が必要である。

(2) 粘り強く挑む力

① 小学校



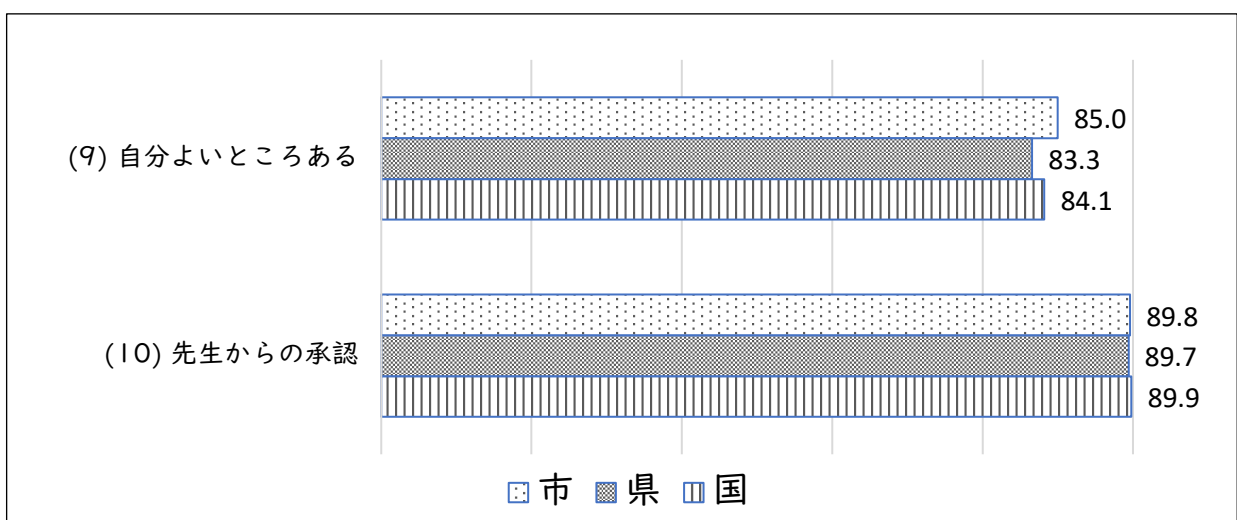
② 中学校



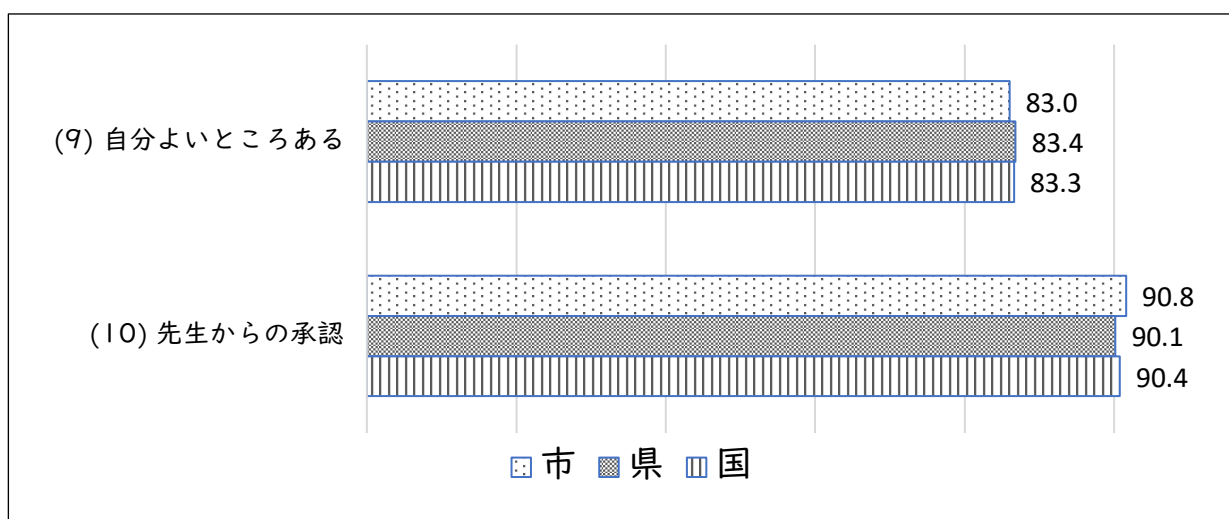
小学校は、県、国の数値を上回っているが、中学校では全国比-4.0%となっている。中学生の一部は、学習や生徒会活動、部活動などで時間的に余裕のない日々を過ごしており、将来のことまで目を向けることができていないことが考えられる。学校では、総合的な学習の時間においてキャリア教育や、地域の大人と関わる機会を創出し、将来に向けての展望を持てるようにすることが必要と考える。

(3) 自己有用感・自己効力感

① 小学校



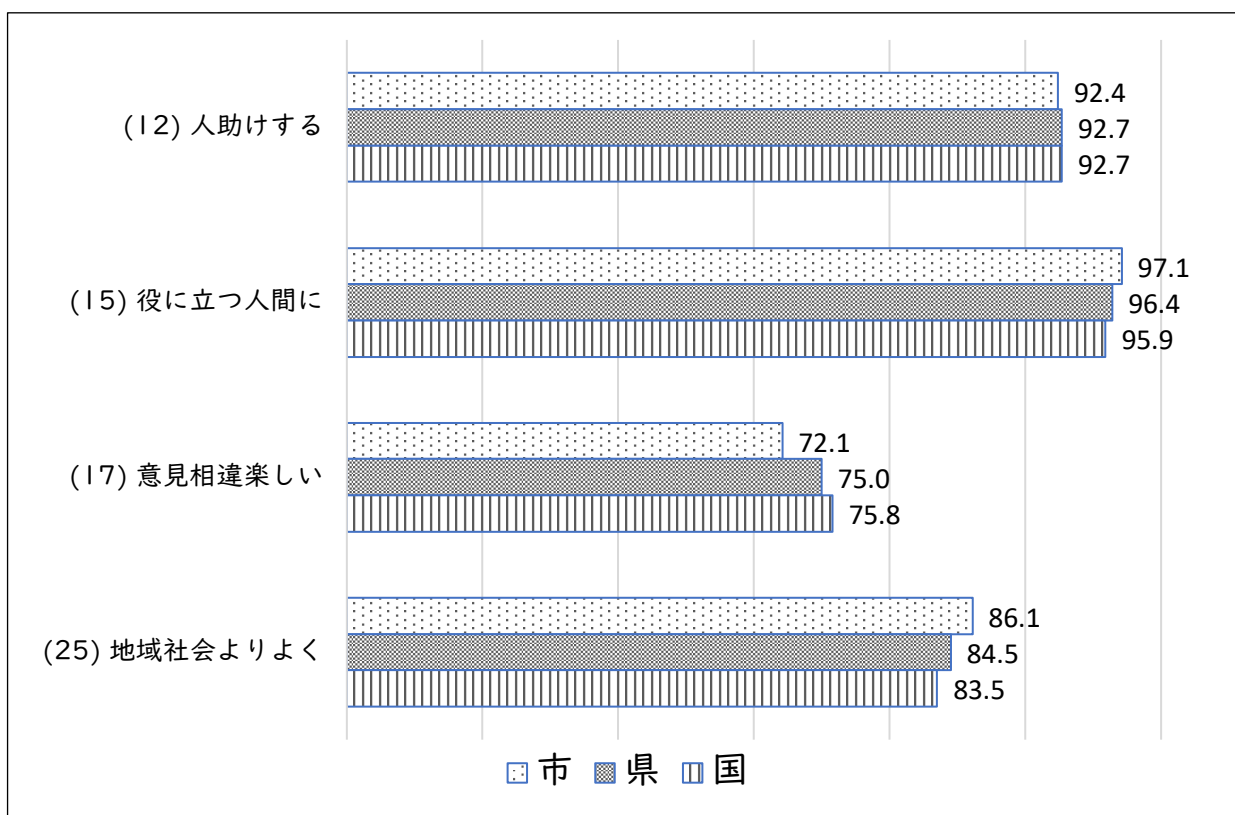
② 中学校



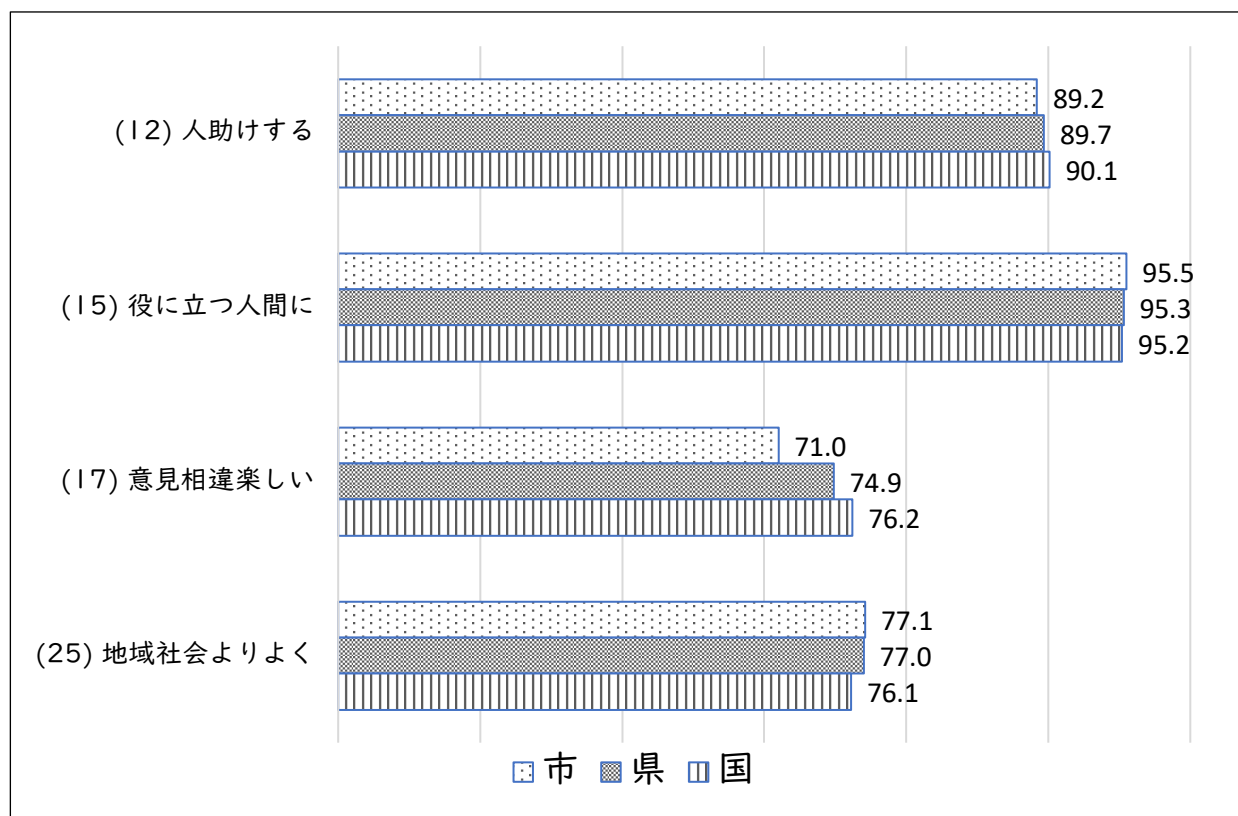
小学校、中学校とも県、国と同等もしくは上回っている。これは、学校教育全体において教師による声かけ、生徒指導等の対応が充実していることを表している。今後は、否定的な回答をした児童生徒に対し個別に話をする時間などを計画的に創出する必要がある。

(4) 協働する力

① 小学校



② 中学校

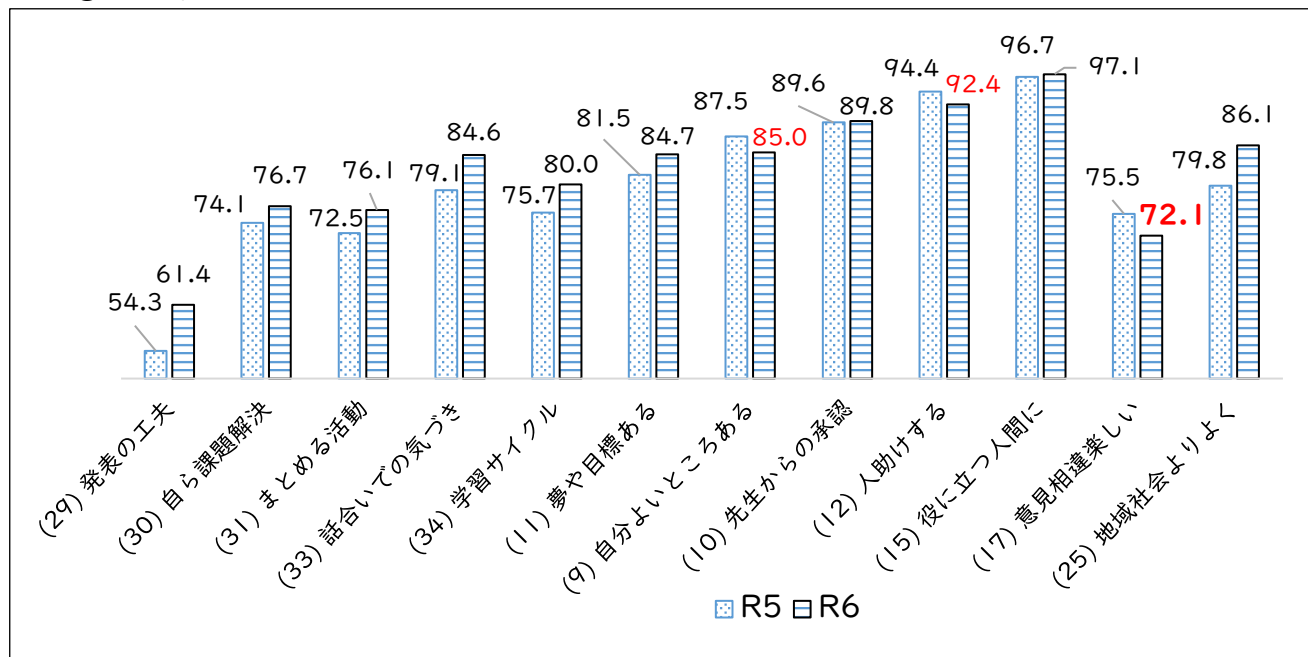


「(17) 自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」の質問項目は、小学校-3.7%、中学校-5.2%と大きく全国比を下回っている。これは「学びを調整する力」（主に授業での児童生徒の取組状況）に関する質問項目のほとんどが全国比を下回っていることと関係している。学級活動や特別の教科道徳等の授業で、意見の違いを意図的に取り上げて、皆で練り上げていく授業づくりが必要と考える。

(5) 経年比較

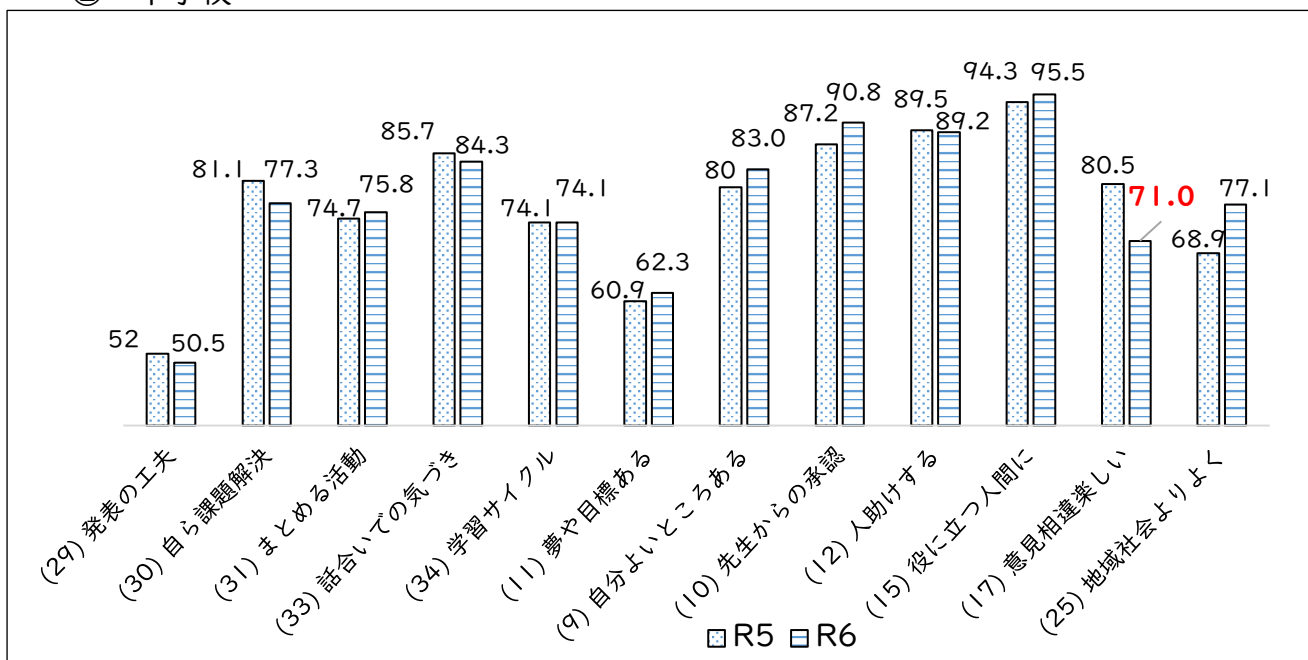
(質問 No.20 は令和 6 年度調査から変更のため比較なし)

① 小学校



令和 5 年度と比較すると概ね上昇している。特に、(29)発表の工夫は、全ての項目の中で最も割合は低いものの、前年度に比べ 7.1% 上昇しており、各学校における課題の把握と解決に向けた取組が推進されたことが伺える。前年度を下回ったのは(9)、(12)、(17)の 3 項目であった。(9)、(12)に関しては、集団づくり、学級・学年の風土に起因することが多いことから、教員間の日常的な情報共有など「チーム学校」としての組織強化が求められる。(17)に関しては、先にも述べたように教員の授業力量が大きく起因するものであり、年間を通して、教員同士で学び合い、力量を高めていく校内 OJT システムの構築等、研修の在り方を工夫する必要がある。

② 中学校

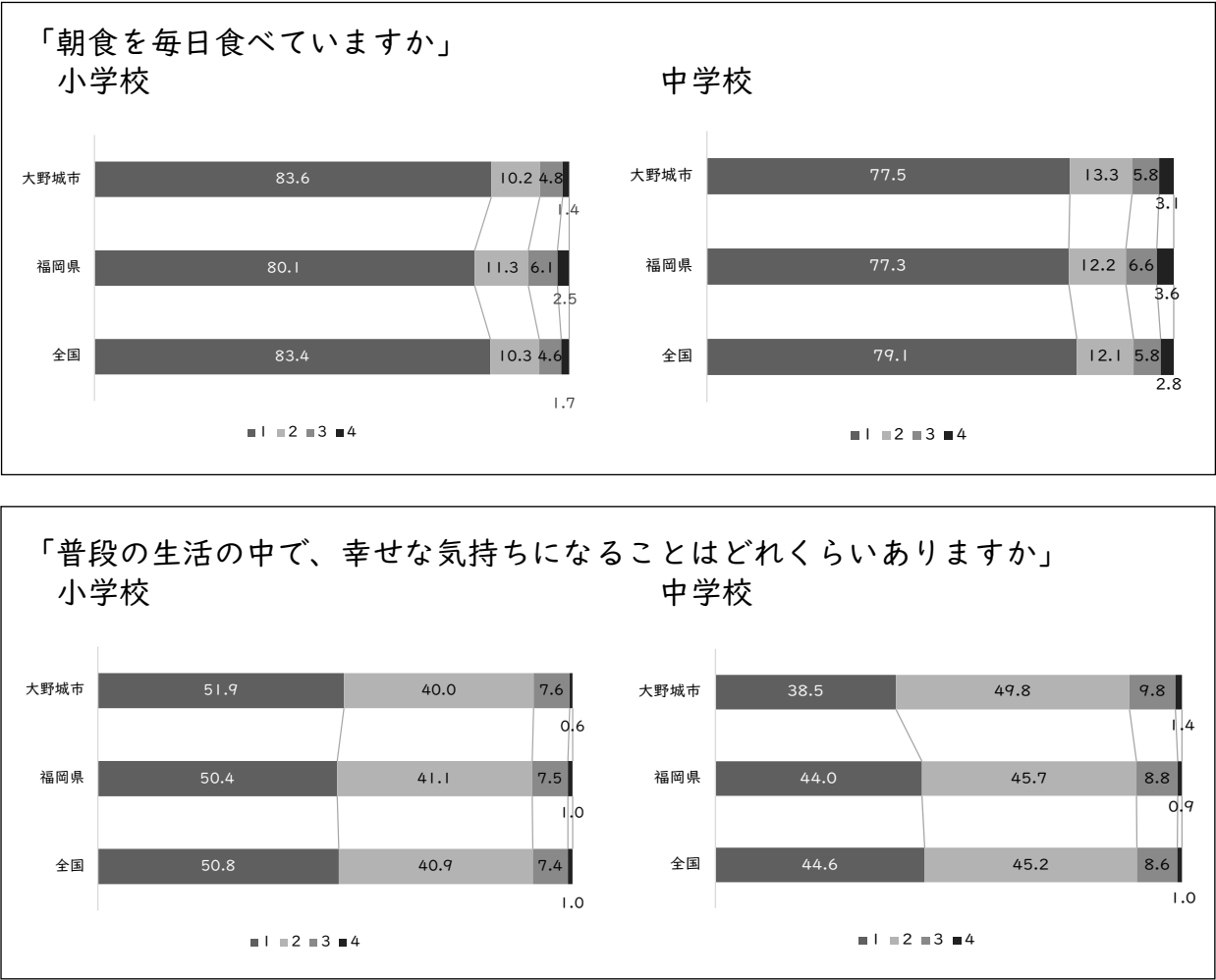


令和5年度と比較すると6項目で上昇、5項目で下降している。下降している項目は授業づくりに起因することが多い。基礎的な知識・技能の定着を図ることに重点を置く
と教え込みやドリル学習など受信型の授業、個人作業の時間が多くなる。知識・技能、
思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度の3観点をバランスよく育成するため
に、個人では解決できない、一単位時間では解決できない学習課題を提示するなどの工
夫が求められている。知識・技能を習得してから思考・判断・表現を評価する授業スタ
イルから児童生徒が単元の終末段階で思考力、判断力、表現力等を発揮するために必要
に応じて知識及び技能を身につけていくスタイルを確立していく必要がある。

2 その他

その他の質問において「生活に関する項目」「学校生活に関する項目」「授業に関する項目」について分析する。
(1…当てはまる 2…どちらかといえば当てはまる 3…どちらかといえば当てはまらない 4…当てはまらない)

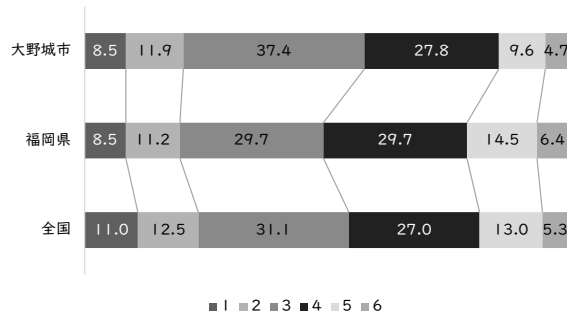
① 生活に関する項目



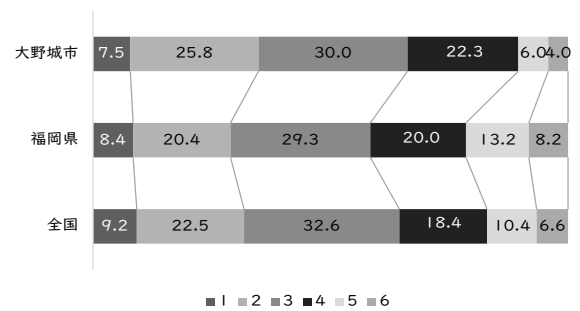
「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」

（１…３時間以上 ２…２時間以上３時間より少ない ３…１時間以上２時間より少ない ４…３０分以上１時間より少ない
５…３０分より少ない ６…全くしない）

小学校



中学校

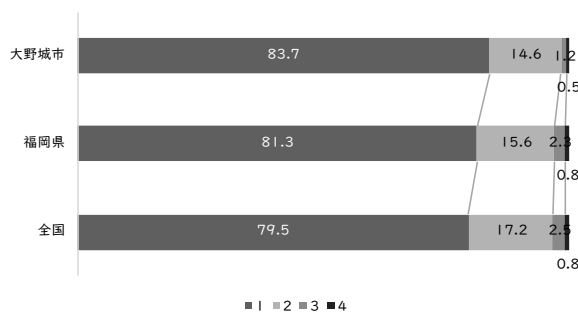


学校以外での学習時間は全国、福岡県平均に比べて多い。「普段の生活で幸せな気持ちになるか」の項目で「とても」と答えた中学生は全国平均に比べて6.1%少ない。小学校段階では全国平均よりも高いことから、中学生は習い事等で家庭生活にゆとりを感じる事が少ないのではいかと考える。

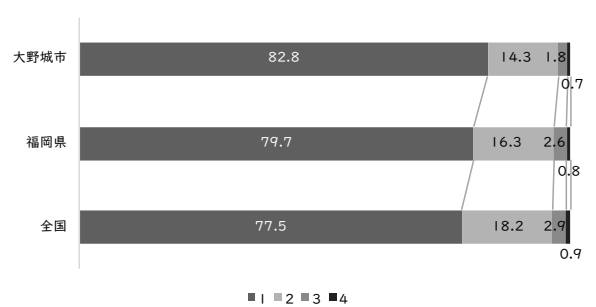
② 学校生活に関する項目

「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」

小学校

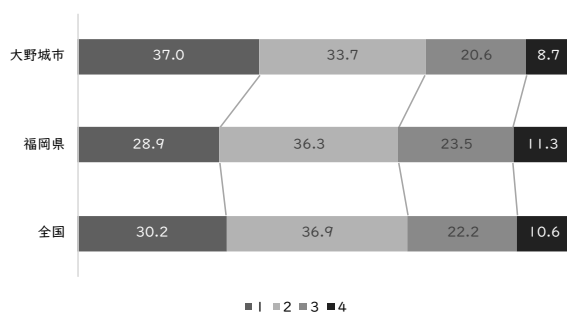


中学校

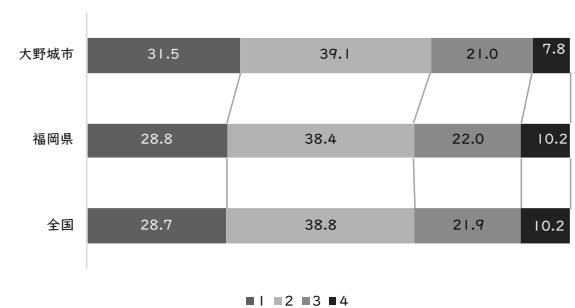


「困りごとや不安がある時に先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」

小学校



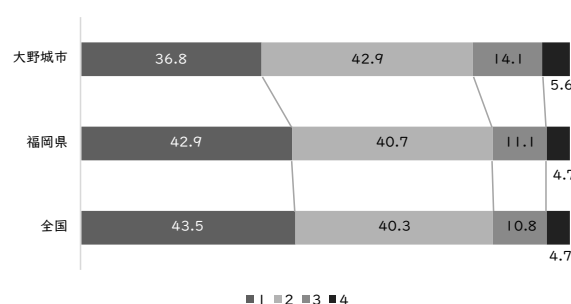
中学校



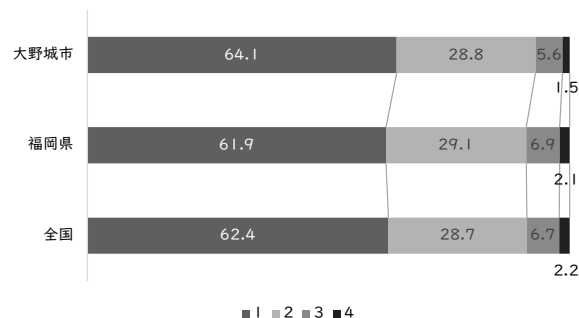
「学校に行くのは楽しいと思いますか」
小学校



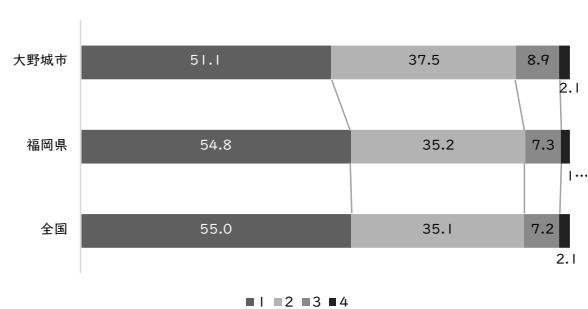
中学校



「友達関係に満足していますか」
小学校



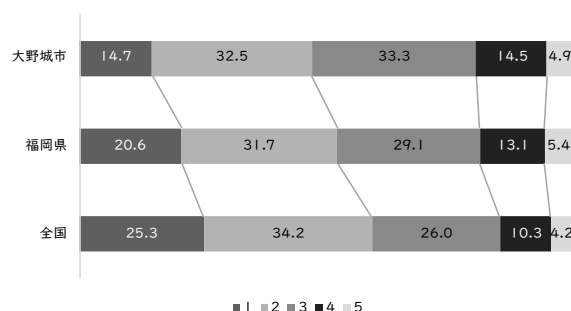
中学校



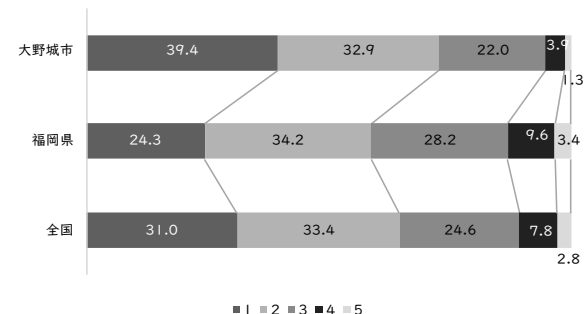
いじめを許さない心は全国、福岡県平均に比べて高い。これは全小中学校で取り組んでいる心の教育の結果と言える。一方、「学校に行くのは楽しい」「友達関係に満足」については全国平均より低い。特に中学校では差がより大きい。正答率は高いが学校満足度は全国平均より低いことを考えると、今後さらに生徒主体の学校づくりが求められる。

③ 授業に関する項目

「4、5（1、2）年生のときに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」
小学校

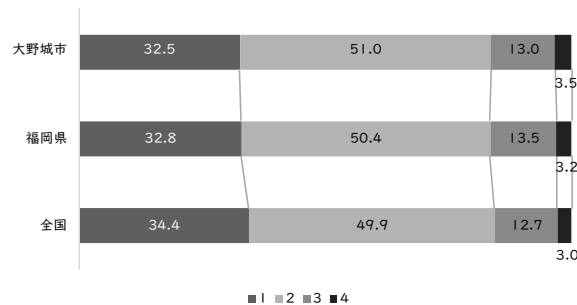


中学校

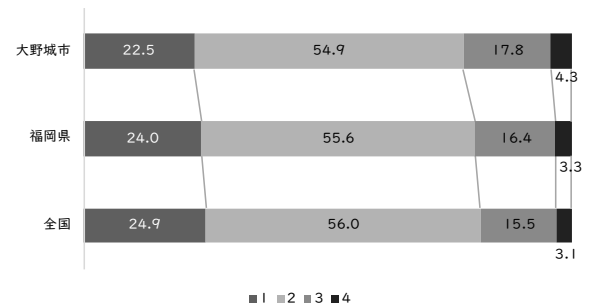


「5（2）年生のときに受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか」

小学校

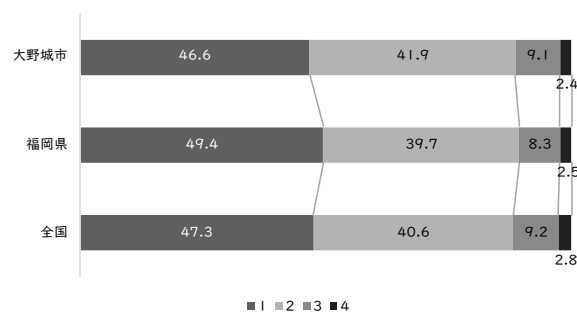


中学校

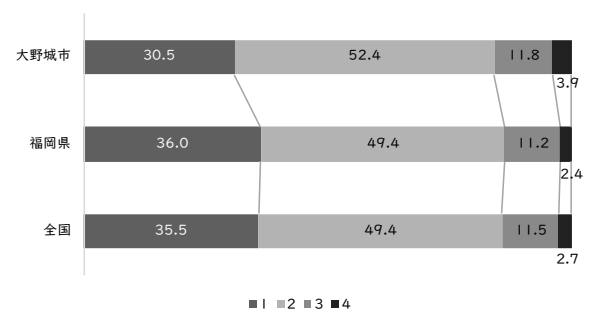


「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」

小学校

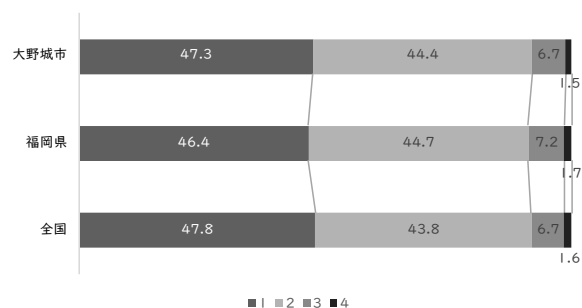


中学校

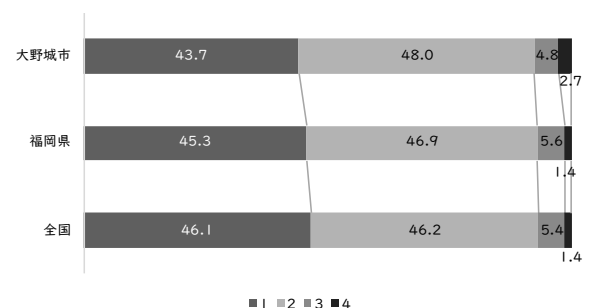


「授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか」

小学校



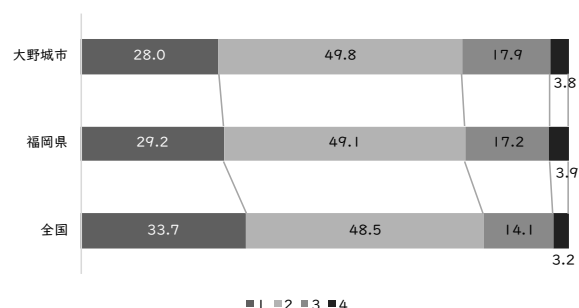
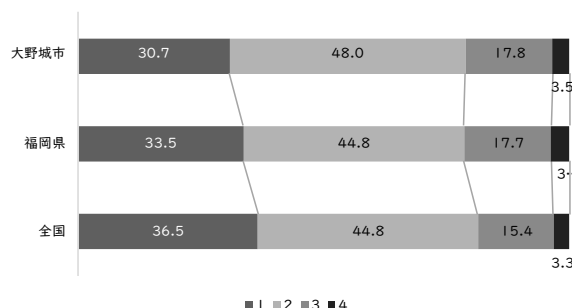
中学校



「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」

小学校

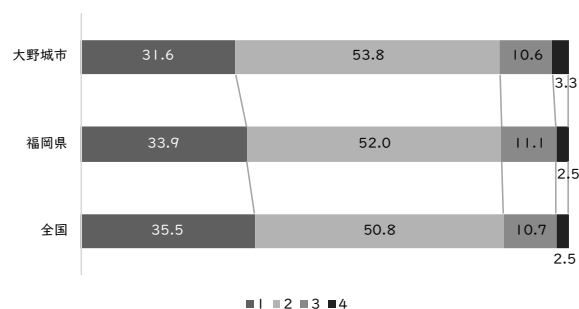
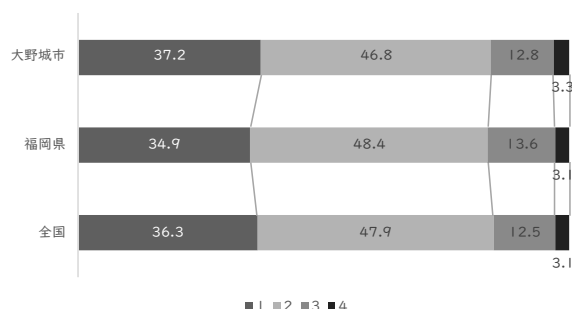
中学校



「あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか」

小学校

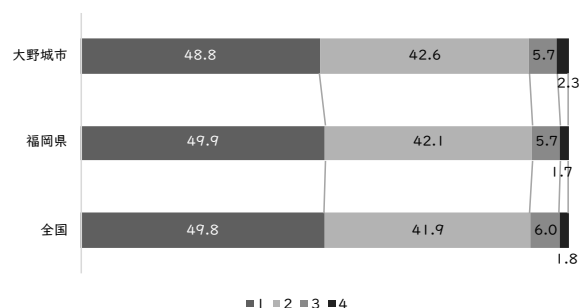
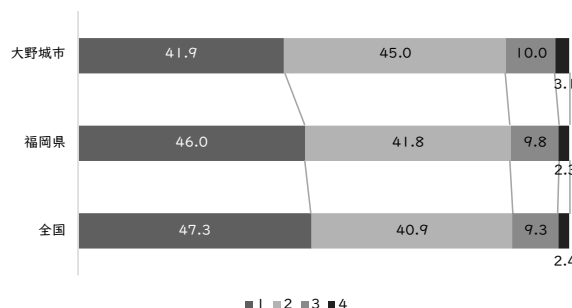
中学校



「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか」

小学校

中学校



ICTの利活用は中学校で全国比を大きく上回っている。小学校で低いのは、各教科等の特色に合わせて、紙に書いて習熟する時間を設定しているからである。「先生は分かるまで教えてくれているか」に対する中学校の回答が全国を下回っている。生徒が深く学習内容を把握し、その場面では多くの時間を割くなどの工夫が必要である。総合的な学習の時間に関しては、市内小中学校の好事例を共有するなど、対応を早急に行う。

V 令和6年度福岡県学力調査の結果

- 1 調査日時 令和6年6月18日(火)
- 2 対象児相生徒 小学校第5学年及び中学校第1学年、第2学年
- 3 調査方法 小学校第5学年 国語、算数
中学校第1学年、第2学年 国語、数学
- 4 調査結果(平均正答率)

(1) 小学校

第5学年	国語	算数
大野城市	71.7	68.3
福岡県	65.8	62.5
県平均比	109.0	109.3
R5県平均比 〔比較〕	109.7 [-0.7]	111.2 [-1.9]

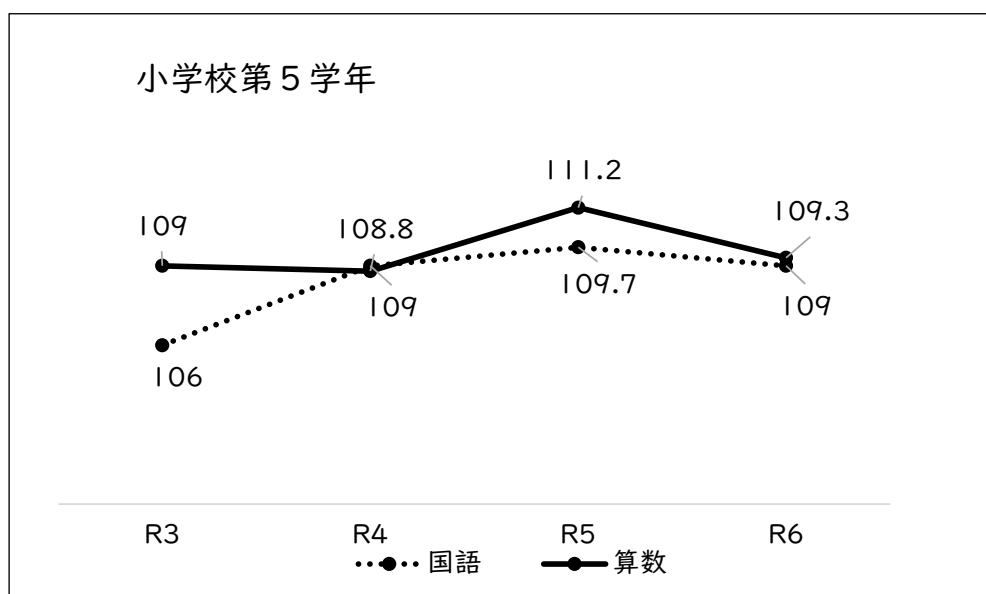
(2) 中学校

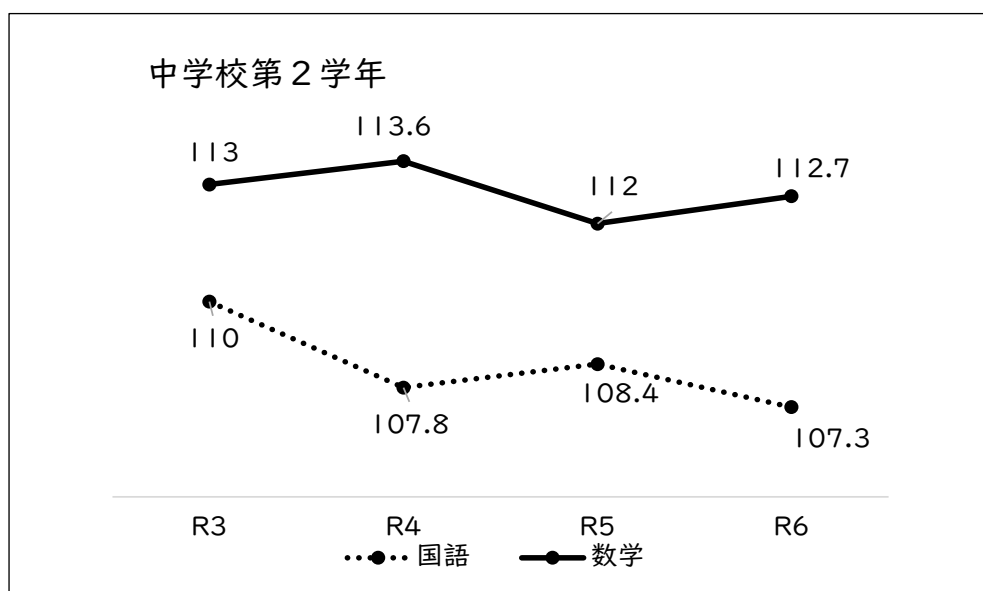
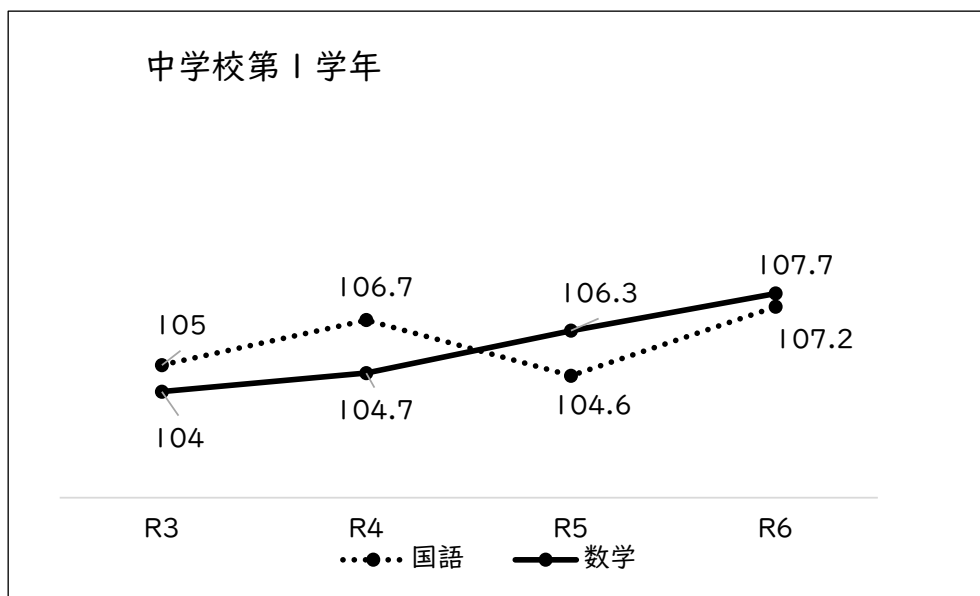
第1学年	国語	数学
大野城市	69.4	67.2
福岡県	64.7	62.4
県平均比	107.2	107.7
R5県平均比 〔比較〕	104.6 [+2.6]	106.3 [+1.4]

第2学年	国語	数学
大野城市	60.0	56.7
福岡県	55.9	50.3
県平均比	107.3	112.7
R5県平均比 〔比較〕	108.4 [-1.1]	112.0 [+0.7]

※ 県平均比は(正答率÷県平均正答率)×100で算出

(3) 経年変化





- 全ての学年及び教科において福岡県平均を上回っている。本市小・中学校のカリキュラム・マネジメントの充実が伺える。また、教師の授業展開や子どもによる学び合いの質の高さも結果に反映していると言える。
- 小学校では、過去3年間の数値から国語、算数ともに高い正答率を維持している。中学年から高学年にかけて学習内容の難易度が高くなることに各学校が柔軟に対応していることが分かる。
- 中学校第1学年では、過去3年間の数値から正答率は上昇傾向にある。これは、小学6年における学習指導が効果的に行われていることを表している。
- 中学校第2学年では、過去3年間の数値から国語の正答率が下降傾向にある。このことから中学1年における学習指導が生徒の実態に即したものになっているか検証する必要がある。

5 調査の結果

(1) 小学校5年生国語

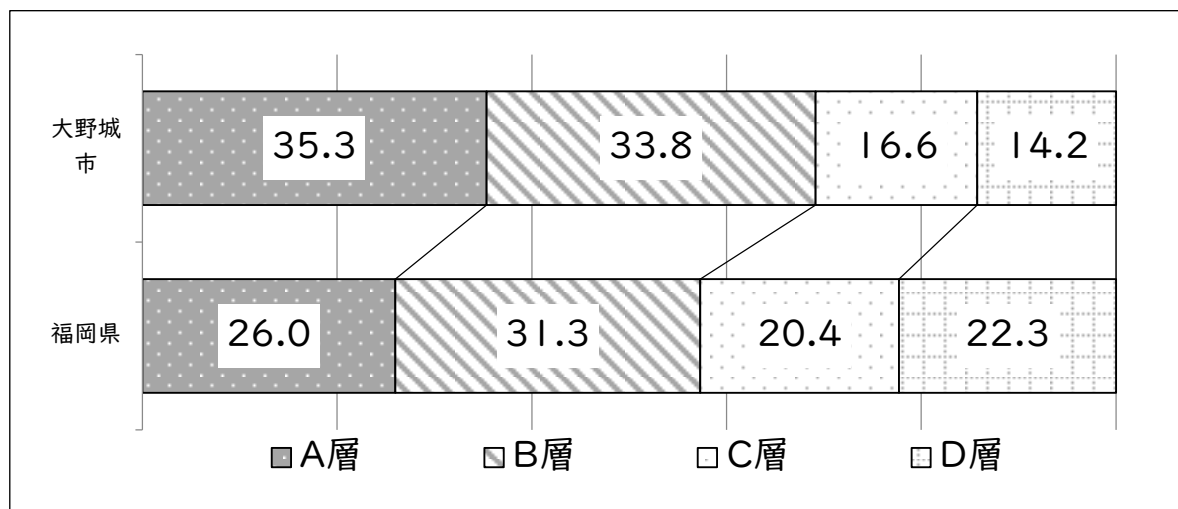
ア 学習指導要領の領域別

領域	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	79.7	73.6	108.3
話すこと・聞くこと	62.8	56.6	111.0
書くこと	51.5	44.6	115.5
読むこと	75.7	70.9	106.8

イ 評価の観点別正答率

評価の観点	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	79.7	73.6	108.3
思考・判断・表現	64.6	58.7	110.1

ウ 四分位層の割合（％）



エ 分析

- 全ての領域において福岡県比を上回っている。「書くこと」については、福岡県比は高いが正答率は51.5%と最も低い。「書くこと」の習熟には時間を要するため、低学年からの系統的な指導が必要と考える。
- 評価の観点別では両観点ともに福岡県比を大きく上回っている。基礎的な力に加えて思考力、判断力、表現力等が求められる問題にも対応できる力が備わっていることを示している。
- 四分位層の割合から、A、B層が多く、C、D層が少ないという良好な状態がみられる。特にD層が15%を下回っていることは、個に応じた学習が展開されている結果と言える。
- 「書くこと」の正答率と四分位層を比べるとB層の半数は「書くこと」の問題を解くことができていないことが分かる。「書くこと」については、国語科だけでなく学校全体の課題と捉え、手だてを講じる必要がある。

(2) 小学校 5 年生算数

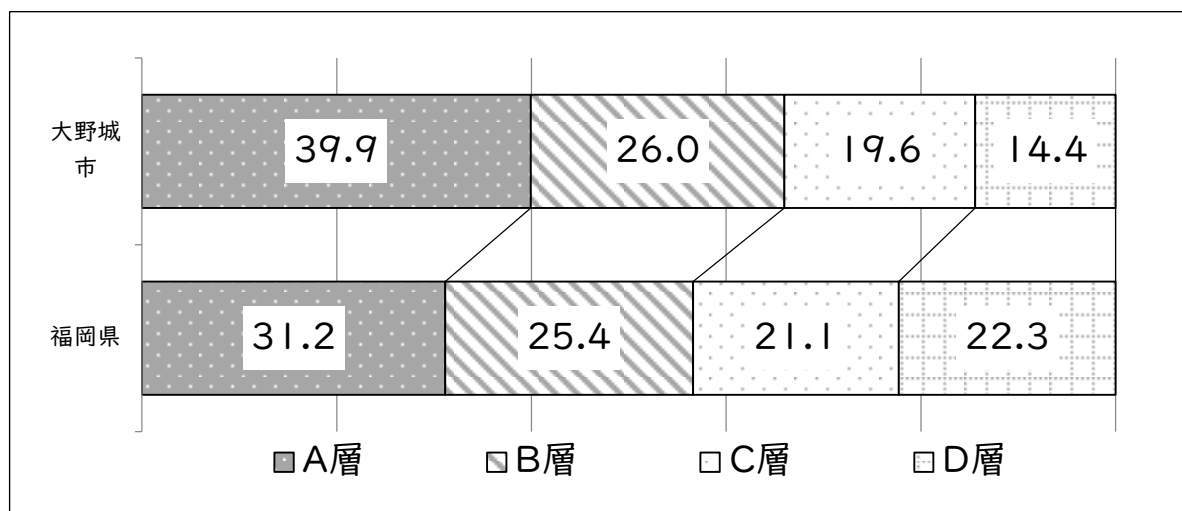
ア 学習指導要領の領域別

領域	大野城市	福岡県	福岡県比
数と計算	67.4	61.9	108.9
図形	62.5	57.1	109.5
変化と関係	73.0	65.4	111.6
データの活用	74.0	68.5	108.0

イ 評価の観点別正答率

評価の観点	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	73.0	68.0	107.4
思考・判断・表現	63.0	56.3	111.9

ウ 四分位層の割合 (%)



エ 分析

- 全ての領域において福岡県比を上回っている。「図形」の問題は難易度が高く正答率が最も低い。高学年では、より複雑な図形の理解が求められるので、指導方法の一層の工夫が必要である。
- 評価の観点別では両観点ともに福岡県比を大きく上回っている。基礎的な力に加えて思考力、判断力、表現力等が求められる問題にも対応できる力が備わっていることを示している。
- 四分位層の割合から、A、B層が多く、C、D層が少ないという良好な状態がみられる。特にD層が15%を下回っていることは、個に応じた学習が展開されている結果と言える。国語に比べると若干C層が多いので、B層の下位からC層への支援の充実を図る必要がある。
- 「図形」の正答率と四分位層を比べると、C、D層の児童は図形問題を解くことができていないことが分かる。高学年での難易度の上昇を考えると個別の支援を充実させるなどの対策が必要である。

(3) 中学校 1 年生国語

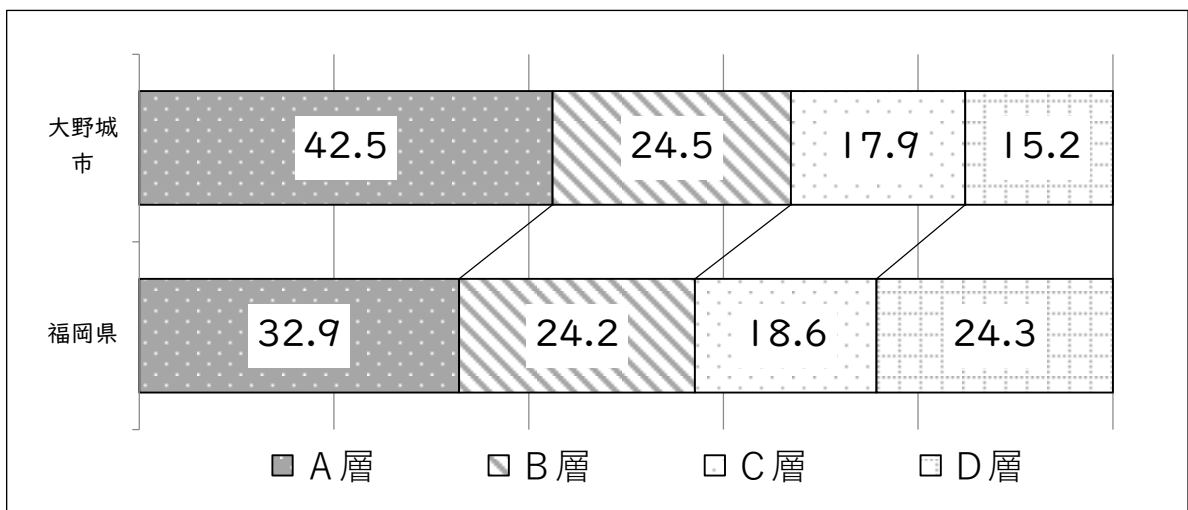
ア 学習指導要領の領域別

領域	大野城市	福岡県	福岡県比
知識及び技能	75.1	70.2	107.0
話すこと・聞くこと	77.9	74.0	105.3
書くこと	55.0	50.2	109.6
読むこと	65.0	60.1	108.2

イ 評価の観点別正答率

評価の観点	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	75.1	70.2	107.0
思考・判断・表現	64.9	60.3	107.6

ウ 四分位層の割合 (%)



エ 分析

- 全ての領域において福岡県比を上回っている。「書くこと」については、福岡県比は高いが正答率は 55% と最も低い。小学校同様「書くこと」の習熟には時間を要するため、系統的な指導が必要と考える。
- 評価の観点別では両観点ともに福岡県比を大きく上回っている。基礎的な力に加えて思考力、判断力、表現力等が求められる問題にも対応できる力が備わっていることを示している。
- 四分位層の割合から、A、B 層が多く、C、D 層が少ないという良好な状態がみられる。特に A 層が 40% を上回っていることは、小学 6 年時の指導が上位層に効果的だったことが分かる。
- 「書くこと」の正答率と四分位層を比べると B 層下位は「書くこと」の問題を解くことができていないことが分かる。「書くこと」については、小学校同様国語科だけでなく学校全体の課題と捉え、手だてを講じる必要がある。

(4) 中学校 1 年生数学

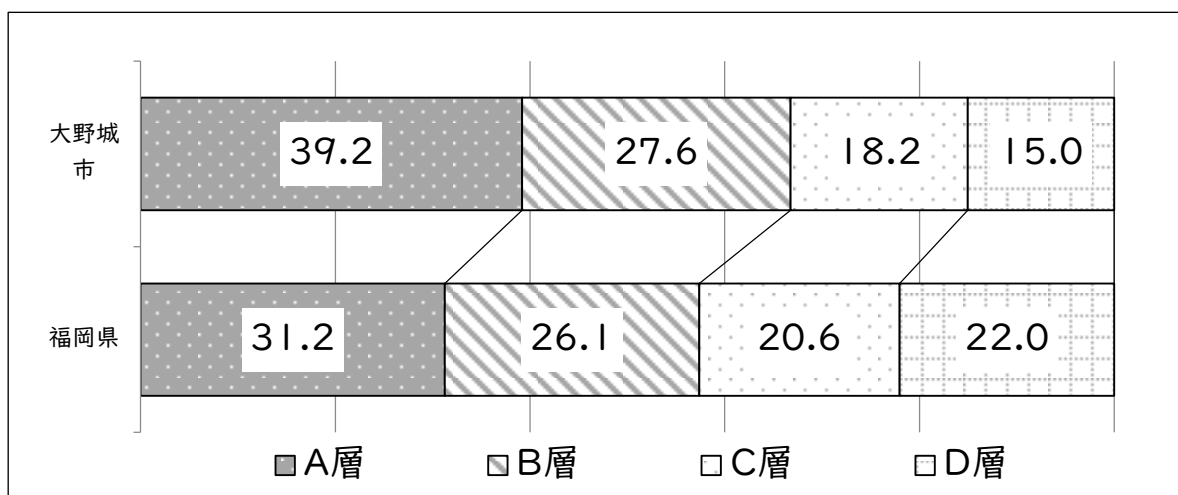
ア 学習指導要領の領域別

領域	大野城市	福岡県	福岡県比
数と計算	63.6	58.6	108.5
図形	69.8	66.0	105.8
変化と関係	76.5	71.6	106.8
データの活用	64.8	59.6	108.7

イ 評価の観点別正答率

評価の観点	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	71.5	67.1	106.6
思考・判断・表現	62.5	57.3	109.1

ウ 四分位層の割合 (%)



エ 分析

- 全ての領域において福岡県比を上回っている。「図形」については、福岡県比との差が最も少ないが、正答率は 69.8%で「変化と関係」に次いで高い。
- 評価の観点別では両観点ともに福岡県比を上回っている。基礎的な力に加えて思考力、判断力、表現力等が求められる問題にも対応できる力が備わっていることを示している。
- 四分位層の割合から、A、B 層が多く、C、D 層が少ないという良好な状態がみられる。特に D 層が 15%に抑えられていることは、難易度が上がる小学校高学年において苦手意識を生まない丁寧な指導が行われていると言える。

(5) 中学校2年生国語

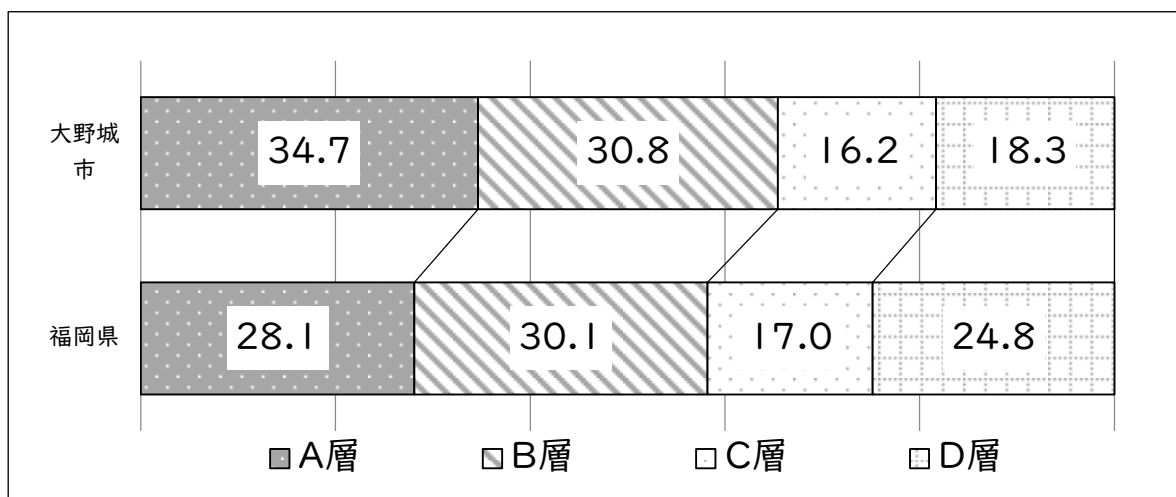
ア 学習指導要領の領域別

領域	大野城市	福岡県	福岡県比
知識及び技能	65.9	62.2	105.9
話すこと・聞くこと	64.5	61.4	105.0
書くこと	54.5	49.7	109.7
読むこと	52.8	48.0	110.0

イ 評価の観点別正答率

評価の観点	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	65.9	62.2	105.9
思考・判断・表現	57.0	52.8	108.0

ウ 四分位層の割合(%)



エ 分析

- 全ての領域において福岡県比を上回っている。中学2年では「書くこと」に加えて「読むこと」の問題に難しさを感じていることが分かる。「書くこと」の系統的な指導はもちろん、「読むこと」については、各学校の生徒の課題を把握し指導の改善を図る必要がある。
- 評価の観点別では両観点ともに福岡県比を大きく上回っている。基礎的な力に加えて思考力、判断力、表現力等が求められる問題にも対応できる力が備わっていることを示している。
- 四分位層の割合から、D層が18.3%と中学1年に比べて割合が高くなっている。中学校では学年が上がるにつれて学力の二極化が進むので、子ども同士の学び合いの時間を設定するなど指導方法の工夫が必要である。

(6) 中学校2年生数学

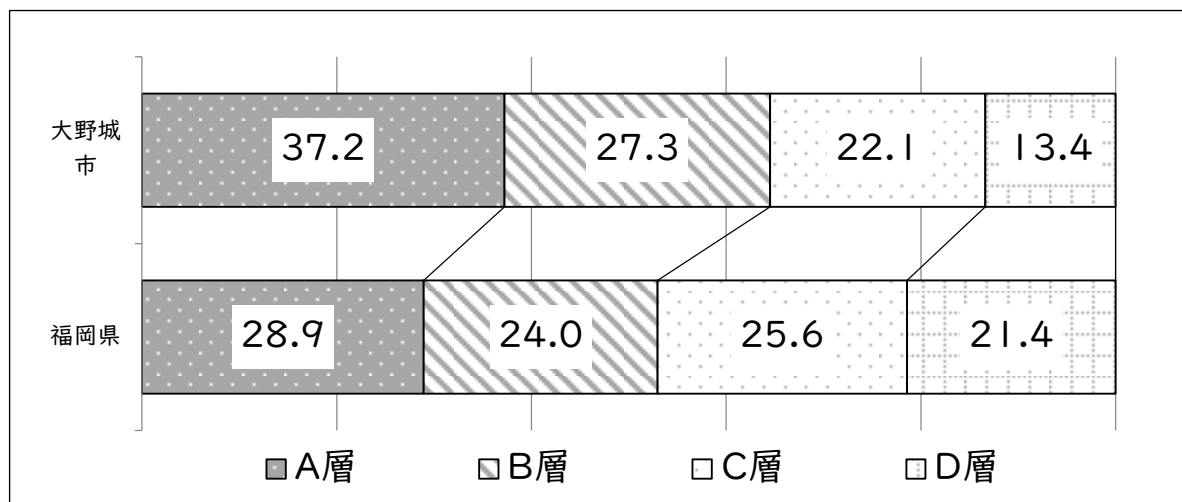
ア 学習指導要領の領域別

領域	大野城市	福岡県	福岡県比
数と式	58.3	51.1	114.1
図形	44.7	40.6	110.1
関数	66.0	60.9	108.4
データの活用	56.0	47.1	118.9

イ 評価の観点別正答率

評価の観点	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	71.5	64.4	111.0
思考・判断・表現	36.4	31.0	117.4

ウ 四分位層の割合(%)



エ 分析

- 全ての領域において福岡県比を上回っている。「図形」については、福岡県比は高いが正答率は44.7%で最も低い。中学1年時の「図形」問題に難しさを感じている生徒が多いことが分かる。
- 評価の観点別では両観点ともに福岡県比を上回っている。「思考・判断・表現」では福岡県比は高いものの正答率を見ると、問題の難易度の高さが伺える。発展的な課題を授業でどう活用していくかを見直す必要がある。
- 四分位層の割合から、D層が13.4%と非常に少ないという良好な状態がみられる。難易度が上がる中学生数学の学習において個に応じた丁寧な指導が行われていると言える。